

日和下駄

一名 東京散策記

永井荷風

青空文庫

序

東京市中散歩の記事を集めて『日和下駄』と題す。そのいはれ本文のはじめに述べ置きたれば改めてここには言はず。『日和下駄』は大正三年夏のはじめころよりおよそ一歳あまり、月々雑誌『三田文学』に連載したりしを、この度米刃堂主人のもとめにより改竄かいざんして一卷とはなせしなり。ここにかく起稿の年月を明あきらにしたるはこの書板成りて世に出づる頃には、篇中記する所の市内の勝景にして、既に破壊せられて跡方もなきところ尠すくなからざらん事を思へばなり。見ずや木造の今戸橋いまどぼしは蚤はやくも変じて鉄の釣橋となり、江戸川の岸はせめんとにかためられて再び露草つゆくさの花を見ず。桜田御門外さくらだごもんそとまた芝赤羽橋向の閑地むこうあきちには土木の工事今まさに興おこらんとするにあらずや。昨日の淵ふち今日の瀬となる夢の世の形見を伝へて、拙つたなきこの小著、幸に後の日のかたり草の種ともならばなれかし。

乙卯いつぼうの年晩秋

荷風小史

第一 日和下駄

人並はずれて丈せいが高い上にわたしはいつも日和下駄ひよりげたをはき 蝙蝠傘こうもりがさを持って歩く。いか
 に好よく晴れた日でも日和下駄に蝙蝠傘でなければ安心がならぬ。これは年中湿気しつけの多い東
 京の天気に対して全然信用を置かぬからである。変りやすいは男心に秋の空、それにお上かみ
 の御政事おせいじとばかり極きまつたものではない。春の花見頃ひるまえ午前の晴天は午後ひるすぎの二時三時頃か
 らきまつて風にならねば夕方から雨になる。梅雨つゆの中は申すに及ばず。土用どように入ればいつ
 いかなる時驟雨しゅうう沛然はいぜんとして来きたらぬとも計はかりがたい。尤もこの変りやすい空模様思もいが
 けない雨なるものは昔の小説に出て来る才子佳人わりが割わりなき契ちぎりを結ぶよすがとなり、また今
 の世にも芝居のハネから急に降出す雨を幸いそのまま人目をつつむ幌ほろの中うち、しつぽり何処どこ
 ぞで濡れの間を演ずるものまたなきにしもあるまい。閑話休題それはさておき日和下駄の効能といわば
 何ぞそれ不意の雨のみに限らんや。天気つづきの冬の日といえども山の手一面赤土こねかを捏こね
 返えす霜解しもとけも何のその。アスファルト敷きつめた銀座日本橋の大通おおどおり、やたらに溝どぶの
 水を撒まきちらす泥濘ぬかるみとて一向驚くには及ぶまい。

わたし
私はかくの如く日和下駄をはき蝙蝠傘を持って歩く。

市しちゆう中の散歩は子供の時から好きであつた。十三、四の頃私の家うちは一時小石川こいしかわから麴こ町うじまちながたちよう永田町ながたちようの官舎ひきうつへ引移ひきうつつた事があつた。勿論電車もちろんのない時分である。私は神かんだ田錦町にしきちようの私立英語学校かよへ通つていたので、半蔵御門はんぞうごもんを這入はいつて吹上御苑ふきあげぎよえんの裏手なる老松ろうしやう鬱々だいかんちようたる代官町とおりの通をばやがて片側に二の丸三の丸の高い石垣と深い堀とを望みながら竹橋たけばしを渡つて平川口ひらかわぐちの御城門ごじやうもんを向うに昔の御搗屋おつきや今の文部省に沿うて一ツ橋ひとばしへ出る。この道程みちのりもさほど遠いとも思わず初めの中うちは物珍しいのでかえつて楽しかつた。宮内省裏門くないしやうの筋すじむこう向なる兵營に沿うた土手の中腹えのきに大きな榎えのきがあつた。その頃その木蔭こかげなる土手下の路みちばた傍に井戸があつて夏冬ともに甘酒あまさけ大福餅だいふくもち稲荷いなり鮓ずし鮎あめゆなんぞ売るものがめいめい荷おろを卸して往来の人の休むのを待つていた。車力しゃりきや馬方うまかたが多い時には五人も六人も休んで飯をくつてゐる事もあつた。これは竹橋の方から這入ひつて来ると御城内ごじやうない代官町の通は歩くものにはそれほどに氣がつかないが車を曳くものには限りも知れぬ長い坂になつていて、丁度この辺へんがその中途に當つてゐるからである。東京の地勢はかくの如く漸次ぜんじに麴町四谷よつやの方へと高くなつてゐるのである。夏の炎天には私も学校の帰途かえりみち井戸の水で車力や馬方と共に手拭てぬぐいを絞つて汗を拭き、土手の上に登つて大

榎の木蔭に休んだ。土手にはその時分から既に「昇ルベカラズ」の立札たてふだが付物つきものになっていたが構わず登れば堀を隔てて遠く町が見える。かくの如き眺望は敢てあえこのみならず、外濠そとぼりの松蔭まつかげから牛込うしごめ小石川の高台を望むと同じく先ず東京中での絶景であろう。

私は錦町からの帰途桜田御門さくらだごもんの方へ廻ったり九段くだんの方へ出たりいろいろ遠廻りをして目新しい町を通つて見るのが面白くてならなかった。しかし一年ばかりの後途中のちの光景にも少し飽きて来た頃私の家は再び小石川の旧宅に立戻る事になった。その夏始めて両りょう国ごくの水練場すいれんばへ通いだしたので、今度は繁華の下町したまちとおおかわすじ大川筋との光景に一方ならぬ興きようを催すこととなつた。

今日こんにち東京市中の散歩は私の身に取つては生れてから今日に至る過去の生涯に対する追憶たじの道を辿るに外ならない。これに加うるに日々昔ながらの名所古蹟を破却はきやくして行く時勢の変遷は市中の散歩に無常悲哀の寂しい詩趣を帯びさせる。およそ近世の文学に現れた荒廢の詩情を味おうとしたら埃及エジプトイタリイタリア及伊太利に赴かずとも現在の東京を歩むほど無残にも傷ましい思おもいをさせる処はあるまい。今日きよう見て過ぎた寺の門、昨日きのう休んだ路傍ろぼうの大樹もこの次再び来る時には必貸家かならずか製造場せいぞうばになつてゐるに違ひないと思えば、それほど由緒ゆかりのない建築もまたはそれほど年経ぬ樹木とても何とはなく奥床おくゆかしくまた悲しく打仰うちあおがれる

のである。

一体江戸名所には昔からそれほど誇るに足るべき風景も建築もある訳ではない。既に宝
 晋齋其角が『類柑子』にも「隅田川絶えず名に流れたれど加茂桂よりは賤しくして肩
 落ちたり。山並もあらばと願はし。目黒は物ふり山坂おもしろけれど果てしなくて
 水遠し、嵯峨に似てさみしからぬ風情なり。王子は宇治の柴舟のしばし目を流すべき島
 まやま 山もなく護国寺は吉野に似て一目千本の雪の曙思ひやらるゝにや爰も流なくて口惜し。
 すみよし 住吉を移奉る佃島も岸の姫松の少きに反橋のたゆみをかしからず宰府は崇め
 たてまつ 奉る名のみにして染川の色に合羽ほしわたし思河のよるべに芥を埋む。都府楼観音
 寺唐絵と云はんに四ツ目の鐘の裸なる、報恩寺の薨の白地なるぞ屏風立てしやうな
 り。木立薄く梅紅葉せず、三月の末藤にすがりて回廊に筵を設くるばかり野には心もと
 まらず……云々。」そして其角は江戸名所の中唯ひとつ無疵の名作は快晴の富士ばかり
 だとなした。これ恐らくは江戸の風景に対する最も公平なる批評であろう。江戸の風景堂
 宇には一として京都奈良に及ぶべきものはない。それにもかかわらずこの都会の風景はこ
 の都会に生れたるものに対して必ず特別の興趣を催させた。それは昔から江戸名所に関す
 る案内記狂歌集絵本の類の夥しく出板されたのを見ても容易に推量する事が出来る。

太平の世の武士町人は物見遊山ものみゆうさんを好んだ。花を愛し、風景を眺め、古蹟を訪う事は即ち風流な最も上品な嗜みたしなとして尊ばれていたので、実際にはそれほどの興味を持たないものも、時にはこれを銜てらつたに相違ない。江戸の人が最も盛に江戸名所を尋ね歩いたのは私の見る処やはり狂歌全盛の天明てんめい以後であつたらしい。江戸名所に興味を持つには是非とも江戸軽文学の素養がなくてはならぬ。一步を進むれば戯作者げさくしゃ氣質かたぎでなければならぬ。

この頃私が日和下駄をカラカラ鳴して再び市中しちゆうの散歩を試み初めたのは無論江戸軽文学の感化である事を拒こほまない。しかし私の趣味の中には自らまた近世デレッタンチズムの影響も混まじつていよう。千九百五年巴里パリのアンドレエ・アレエという一新聞記者が社会百般の現象をば芝居でも見る氣になつてこれを見物して歩いた記事と、また仏国各州の都市古蹟あるきまわを歩廻あるきまわつた印象記とを合せてEn 《アン》 Flanant 《フラアナン》と題するものを公にした。その時アンリイ・ボルドオという批評家がこれを機会としてデレッタンチズムの何たるかを解剖批判した事があつた。茲こゝにそれを紹介する必要はない。私は唯西洋ただにも市内の散歩を試み、近世的世相と並んで過去の遺物に興味を持った同様な傾向の人がいた事を断つて置けばよいのである。アレエは西洋人の事故ことゆゑその態度は無論私ほど社会に対して無関心でもなくまた肥遯ひとんてき的でもない。これはその本国の事情が異っているからで

あろう。彼は別に為すべき仕事がないからやむをえず散歩したのではない。自ら進んで観察しようと企てたのだ。しかるに私は別にこれといってなすべき義務も責任も何にもないいわば隠居同様の身の上である。その日その日を送るになりたけ世間へ顔を出さず金を使わず相手を要せず自分一人で勝手に呑気にくらす方法をと色々考案した結果の一つが市中のぶらぶら歩きとなったのである。

フランスの小説を読むと零落れた貴族の家に生れたものが、僅少の遺産に自分の身だけは

どうやらこうやら日常の衣食には事欠かぬ代り、浮世の樂を余所に人交りもできず、

一生涯を果敢なく淋しく無為無能に送るさまを描いたものが沢山ある。こういう人たちは

何か世間に名をなすような専門の研究をして見たいにもそれだけの資力がなし職業を求め

て働きたいにも働く口がない。せん方なく素人画をかいったり釣をしたり墓地を歩いたり

してなりたけ金のいらぬようなその日の送方を考えている。私の境遇はそれとは全

く違う。しかしその行為とその感慨とはやや同じであろう。日本の現在は文化の爛熟して

しまった西洋大陸の社会とはちがつて資本の有無にかかわらず自分さえやる気になれば為

すべき事業は沢山ある。男女烏合の徒を集めて芝居をしてさえもし芸術のためというよう

な名前を付けさえすればそれ相應に看客が来る。田舎の中学生の虚栄心を誘出して

投書を募れば文学雑誌の経営もまた容易である。慈善と教育との美名の下に弱い家業の芸
 人をおどしつけて安く出演させ、切符の押売りで興行をすれば濡手で粟の大儲も出来
 る。富豪の人身攻撃から段々に強面の名前を売り出し懐中の暖くなった汐時を見
 計つて妙に紳士らしく上品に構えれば、やがて国会議員にもなれる世の中。現在の日本
 ほど為すべき事の多くしてしかも容易な国は恐らくあるまい。しかしそういう風な世渡り
 を潔しとしないものは宜しく自ら譲つて退くより外はない。市中の電車に乗つて行先を
 急ごうというには乗換場を過る度ごとに見得も体裁もかまわず人を突き退け我武者羅
 に飛乗る蛮勇がなくてはならぬ。自らその蛮勇なしと省みたならば徒に空いた電車を待
 つよりも、泥亀の歩み遅々たれども、自動車の通らない横町あるいは市区改正の破
 壊を免れた旧道をてくてくと歩くに如くはない。市中の道を行くには必しも市設の電車に
 乗らねばならぬと極つたものではない。いささかの遅延を忍べばまだまだ悠々として濶歩
 すべき道はいくらもある。それと同じように現代の生活は亜米利加風の努力主義を以てせ
 ざれば食えないと極つたものでもない。髭を生し洋服を着てコケを脅そうという田舎紳士
 風の野心さえ起さなければ、よしや身に一銭の蓄なく、友人と称する共謀者、先輩もしく
 は親分と称する阿諛の目的物なぞ一切皆無たりとも、なお優游自適の生活を営む方法は

尠くはあるまい。同じ露店の大道商人となると自分は髭を生し洋服を着て演舌口調に医学の説明でいかさまの薬を売ろうよりむしろ黙して裏町の縁日にボツタラ焼をやくか糝粉細工でもこねるであらう。苦学生に扮装したこの頃の行商人が横風に靴音高くがらりと人の家の格子戸を明け田舎訛りの高声に奥様はおいでかなぞと、ややともすれば強請がましい凄味な態度を示すに引き比べて昔ながらの脚半草鞋に菅笠をかぶり孫太郎虫や水蛭の虫箱根山山椒の魚、または越中富山の千金丹と呼ぶ声。秋の夕や冬の朝なぞこの声を聞けば何とも知れず悲しく淋しい気がするではないか。

されば私のてくてく歩きは東京という新しい都会の壮観を称美してその審美的価値を論じようというのでもなく、さればとて熱心に江戸なる旧都の古蹟を探りこれが保存を主張しようという訳でもない。如何となれば現代人の古美術保存という奴がそもそも古美術の風趣を害する原因で、古社寺の周囲に鉄の鎖を張りペンキ塗の立札に例の何々スベカラズをやる位ならまだしも結構。古社寺保存を名とする修繕の請負工事などと来ては、これ全く破壊の暴挙に類する事は改めてここに実例を挙げるまでもない。それ故私は唯目的なくぶらぶら歩いて好勝手なことを書いていればよいのだ。家にいて女房のヒステリイ面に浮世をはかなみ、あるいは新聞雑誌の訪問記者に襲われて折角掃除した火鉢を敷島

の吸殻だらけにされるより、暇があつたら歩くにしくはない。歩け歩けと思つて、私はてくてくぶらぶらのそのそといういろに歩き廻るのである。

元来がかくの如く目的のない私の散歩にもし幾分でも目的らしい事があるとすれば、それは何という事なく蝙蝠傘こうもりがさに日和下駄ひよりげたを曳摺ひきずつて行く中、電車通の裏手なぞにたまたま残っている市区改正以前の旧道に出たり、あるいは寺の多い山の手の横町よこちょうの木立こだちを仰ぎ、溝や堀割の上にかけてある名も知れぬ小橋を見る時なぞ、何となくそのさびれ果てた周囲の光景が私の感情に調和して少時しばし我にもあらず立去りがたいような心持をさせる。そういう無用な感慨に打たれるのが何より嬉しいからである。

同じ荒廃した光景でも名高い宮殿や城郭じょうかくならば三体詩さんたいしなぞで人も知っているように、「太掖勾陳処疑。薄暮毀垣春雨裏。」「太掖たいえきか勾陳こうちんか処しよ疑うたが。薄暮はくぼの毀垣きえんに、」「太掖勾陳処疑。薄暮毀垣春雨裏。」「春雨しゅんうの裏うち。」「あるいはまた、「煬帝春游古城在。壞宮芳草滿人家。」「煬帝ようだいの春雨しゅんうの裏うち。」「あるいはまた、「煬帝春游古城在。壞宮芳草滿人家。」「遊ゆうせる古城こじょう在あり。壞宮かいきゆうの芳草ほうそう人家じんかに満みつ。」「などと詩にも歌にもして伝えることができよう。

しかし私の好んで日和下駄を曳摺る東京市中の廃址はいしは唯私一個人にのみ興趣を催させるばかりで容易にその特徴を説明することの出来ない平凡な景色である。譬たとえば砲兵工ほうへいこうし

廠ようの煉瓦れんが塀べいにその片側を限られた小石川の富坂とみざかをばもう降おり尽つくそうという左側に一筋みぞの溝かわがある。その流れに沿うて蒟蒻こんやく閻魔えんまの方へと曲まつて行く横町よこまちなぞ即すなわちその一例である。両側やなみの家並は低く道は勝手次第うねに迂うつていて、ペンキ塗の看板や模造西洋造りの硝子戸ガラスどなぞは一軒も見当らぬ処から、折々氷屋の旗なぞの閃ひらめく外には横町の眺望に色彩というものは一ツもなく、仕立屋芋屋駄菓子屋挑灯屋だがしやちようちんやなぞ昔ながらの職業なりわいにその日の暮しを立てている家ばかりである。私は新開町しんかいまちの借家の門口かどぐちによく何々商会だの何々事務所なぞという木札きふだのれいれいしく下くだげてあるのを見ると、何という事もなく新時代のかかる企業に対して不安の念を起すと共に、その主謀者の人物についても甚しく危険を感じるのである。それに引ひかえてこういう貧しい裏町に昔ながらの貧しい渡世とせをしている年寄を見ると同情と悲哀とに加えてまた尊敬の念を禁じ得ない。同時にこういう家の一人娘は今頃周旋屋しゅうせんやの餌えになってどこぞで芸者でもしていはせぬかと、そんな事に思おもひいたたると相も変わらず日本固有の忠孝の思想と人身売買の習慣との関係やら、つづいてその結果の現代社会に及ぼす影響なぞについていろいろ込み入った考えに沈められる。

ついこの間も麻布網代町あざぶあみしろちようへん辺の裏町を通った時、私は活動写真や国技館や寄席よせなぞのビラが崖地がけちの上から吹いて来る夏の風に翻ひるがえつてゐる氷屋の店みせ先、表から一目に見通され

る奥の間で十五、六になる娘が清元きよもとをさらっているのを見て、いつものようにそつと歩あゆみを止めた。私は不健全な江戸の音曲おんぎよくというものが、今日の世にその命脈を保っている事を訝いぶかしく思うのみならず、今もつてその哀調がどうしてかくも私の心を刺※するかを不思議に感じなければならなかった。何気なく裏町を通りかかって小娘の弾ひく三味線しゃみせんに感動するようでは、私は到底世界の新しい思想を迎える事は出来まい。それと共にまたこの江戸の音曲をばれいれしく電気燈の下で演奏せしめる世俗一般の風潮にも伴ともなつて行く事は出来まい。私の感覚と趣味とまた思想とは、私の境遇に一大打撃を与える何物かの来きたる限り、次第に私をして固陋偏狭こうろうへんきやうならしめ、遂には全く世の中から除外されたものにしてしまうであらう。私は折々反省しようと力めても見る。同時に心柄こころがらなる身の末は一体どんなになつてしまうものかと、いつそ放擲ほうてきして自分の身をば他人のようにその果敢はかない行末ゆくすえに対して皮肉な一種の好奇心を感じる事すらある。自分で己れの身を抓つかつてこの位力くらいを入れればなるほどこの位痛いものだど独りでいじめて独りで涙ぐんでいるよなものである。或時は表面に恬淡洒脱てんたんしゃだつを粧よそおっているが心の底には絶えず果敢いあきらめを宿している。これがために「涙でよごす白粉おしろいのその顔かくす無理な酒」というよな珍しくもない唄うたが、聞く度ごとに私の心には一種特別な刺※を与える。私は後うしろから勢

よく襲い過ぎる自動車の響に狼狽して、
 表^{おもて}通^{どおり}から日の当らない裏道へと逃げ込み、そ
 して人^{おく}に後れてよろよろ歩み行く処に、
 わが一家^{いっか}の興味と共に苦しみ、また得意と共に悲
 哀を見るのである。

第二 淫祠

裏町を行こう、横道を歩もう。かくの如く私が好んで日和下駄をカラカラ鳴して行く裏町らどおりにはきまつて淫祠いんしがある。淫祠は昔から今に至るまで政府の庇護を受けたことはない。目こぼしでそのままに打捨てて置かれれば結構、ややともすれば取払われべきものである。それにもかかわらず淫祠は今なお東京市中数え尽されぬほど沢山ある。私は淫祠を好む。裏町の風景に或趣あおもむきを添える上からいつて淫祠は遙はるかに銅像以上の審美的価値があるからである。本所深川ほんじよふかがわの堀割の橋際はしぎわ、麻布芝辺あざぶしばへんの極めて急な坂の下、あるいは繁華な町の倉の間、または寺の多い裏町の角なぞに立っている小さな祠ほこらやまた雨ざらしのままなる石地藏いしじぞうには今もつて必ず願掛がんかけの絵馬えまや奉納の手拭てぬぐい、或時は線香などが上げてある。現代の教育はいかほど日本人を新しく狡猾こうかつにしようとして力めても今だに一部の愚昧ぐまいなる民の心を奪う事が出来ないものであった。路傍ろぼうの淫祠に祈願を籠こめ欠けたお地藏様の頸くびに涎掛よだれかけをかけてあげる人たちは娘を芸者に売るかも知れぬ。義賊になるかも知れぬ。無む尽じんや富籤とみくじの僥倖ぎようこうのみを夢見ているかも知れぬ。しかし彼らは他人の私行を新聞に投

書して復讐を企てたり、正義人道を名として金をゆすつたり人を迫害したりするような文
明の武器の使用法を知らない。

淫祠は大抵その縁起とまたはその効験のあまりに荒唐無稽な事から、何となく滑稽
の趣を伴わすものである。

聖天様には油揚げのお饅頭をあげ、大黒様には二股大根、お稲荷様
には油揚げを献げるのは誰も皆知っている処である。芝日蔭町に鯖をあげるお稲荷様が
あるかと思えば駒込には炮烙をあげる炮烙地蔵というのがある。頭痛を祈つてそれが
癒れば御礼として炮烙をお地蔵様の頭の上に載せるのである。御厩河岸の榎寺には虫歯
に効験のある飴賞地蔵があり、金竜山の境内には塩をあげる塩地蔵というのがあ
る。小石川富坂の源覚寺にあるお閻魔様には蒟蒻をあげ、大久保百人町の
鬼王様には湿瘡のお札に豆腐をあげる、向島の弘福寺にある「石の媼様」には
子供の百日咳を祈つて煎豆を供えるとか聞いている。

無邪気でそしてまたいかにも下賤ばったこれら愚民の習慣は、馬鹿囃子にひよつとこの
踊または判じ物見たような奉納の絵馬の拙い絵を見るのと同じようにいつも限りなく私の
心を慰める。単に可笑しいというばかりではない。理窟にも議論にもならぬ馬鹿馬鹿しい

処に、よく考えて見ると一種物哀れなような妙な心持のする処があるからである。

第三 樹

目に青葉山時鳥やまほととぎす。初鰹はつがつお。江戸なる過去の都会の最も美しい時節における情趣は簡単なるこの十七字にいい尽つくされている。北斎ほくさい及び広重ひろしげらの江戸名所絵めいしょえに描えがかれた所、これを文字もんじに代えたならば、即ちこの一句に尽きてしまふであらう。

東京はその市内のみならず周囲の近郊まで日々開けて行くばかりであるが、しかし幸にも社寺の境内、私人しじんの邸宅、また崖地がけちや路みちのほとりに、まだまだ夥おびただしく樹木を残している。今や工場こうじようの煤烟ばいえんと電車の響おととに日本晴にほんばれの空にも鳶とんびヒヨロヒヨロの声こゑ稀まれに、雨あがりのふけた夜に月は出ても蜀魂ほくととぎすはもう啼なかなくなつた。初鰹あじわいの味とてもまた汽車と氷との便あるがために昔のようにさほど珍しくもなくなつた。しかし目に見る青葉のみに至つては、毎年まいねん花はなちる後の新暦五月となれば、下町したまちの川のほとりにも、山の手の坂の上にも、市中しちゆう到る処その色の美しさにわれらは東京なる都市に対して始めて江戸伝来の固有なる快感を催し得るのである。

東京に住む人、試こころみに初めて衿あわせを着たその日の朝といわず、昼といわず、また夕暮といわ

ず、外出そとでの折の道すがら、九段くだんの坂上、神田かんだの明神みょうじん、湯島ゆしまの天神てんじん、または芝あたらの愛こ宕山やまなど、随処あいだあいだの高台に登つて市中を見渡したまえ。輝く初夏しよかの空の下、際限なくつづく瓦屋根の間に、あるいは銀杏いちょう、あるいは椎しい、檜かし、柳かしなど、いずれも新緑あざやかの色鮮こずえなる梢こずえに、日の光うるわの麗しく照添てりそうさまを見たならば、東京の都市は模倣ぶかりの西洋造と電線と銅像とのためにいかほど醜くされても、まだまだ全く捨てたものでもない。東京にはどこといつて口にはいえぬが、やはり何となく東京らしい固有な趣があるような気がするであらう。

もし今日の東京に果して都会美なるものがあり得るとすれば、私はその第一の要素をば樹木と水流に俟まつものと断言する。山の手を蔽おほう老樹と、下町を流れる河とは東京市の有する最も尊い宝である。巴里パリの巴里パリたる体裁ていさいは寺院宮殿劇場等の建築があれば縦たえ樹と水なくとも足りるであらう。しかるにわが東京においてはもし鬱うつぜん然たる樹木なくんばかの壮麗なる芝山内しばさんないの霊廟れいびようとても完全にその美とその威儀とを保つ事は出来まい。

庭を作るに樹と水の必要なるはいうまでもない。都会の美観を作るにもまたこの二つを除くわけには行ゆかない。幸にも東京の地には昔から夥おびただしく樹木があつた。今なお芝田しばたむらち村町ように残つている公孫樹いちようの如く徳川氏入国にゆうごく以前からの古木だといひ伝えられている

ものも少くはない。小石川久堅町なる光円寺の大銀杏、また麻布善福寺にある親鸞上人手植の銀杏と称せられるものの如き、いずれも数百年の老樹である。浅草観音堂のほとりにも名高い銀杏の樹は二株もある。小石川植物園内の大銀杏は維新後危く伐り倒されようとした斧の跡が残っているために今ではかえつて老樹を愛重する人の多く知る処となっている。東京市中にはもしそれほどの故事来歴を有せざる銀杏の大木を探り歩いたならまだなかなか数多いことであろう。小石川水道端なる往来の真中に立っている第六天の祠の側、また柳原通の汚い古着屋の屋根の上にも大きな銀杏が立っている。神田小川町の通にも私が一橋の中学校へ通う頃には大きな銀杏が煙草屋の屋根を貫いて電信柱よりも高く聳えていた。麴町の番町辺、牛込御徒町辺を通れば昔は旗本の屋敷らしい邸内の其処此処に銀杏の大樹の立っているのを見る。銀杏は黄葉の頃神社仏閣の粉壁朱欄と相対して眺むる時、最も日本らしい山水を作す。ここにおいて浅草観音堂の銀杏はけだし東都の公孫樹中の冠たるものといわねばならぬ。明和のむかし、この樹下に楊枝店柳屋あり。その美女お藤の姿は今に鈴木春信一筆斎文調らの錦絵に残されてある。

銀杏に比すれば松は更によく神社仏閣と調和して、あくまで日本らしくまた支那らしい風景をつくる。江戸の武士はその邸宅に花ある木を植えず、常磐木ときわぎの中にも殊に松たつとを尊たつとび愛した故に、元武家の屋敷のあつた処には今もなお緑の色かえぬ松の姿にそぞろ昔を思もわせる処が少くない。市ヶ谷いちやの堀端ほりばたに高力松こうりきまつ、高田老松町たかたおいまつちように鶴亀松つるかめまつがある。広ひろ重ひろしげの絵本『江戸土産えどみやげ』によつて、江戸の都人士とじんしが遍く名高い松として眺め賞したるものを挙げれば小名木川の五本松、八景坂の鎧掛松よろいかけまつ、麻布の一本松あさぶ、寺島村蓮華寺てらじまむられんげじのすえひろまつ、あおやまりゆうがんじ、かさまつ、かめいどふもんいん、おこしかけまつ、やなぎしまみようけんどう、末広松、青山竜巖寺おぎようの笠松かさまつ、亀井戸普門院かめいどふもんいんの御腰掛松おこしかけまつ、柳島妙見堂やなぎしまみようけんどうの松、根岸ねぎしの御行おぎようの松まつ、隅田川すみだがわの首尾しゆびの松まつなぞその他なおいくらもあるう。しかし大正三年の今日幸に枯死こしせざるものいくばくぞや。

青山竜巖寺の松は北斎の錦絵『富嶽卅六景ふがくさんじゅうろっけい』中にも描かれてある。私は大久保の佗住居わびずまいより遠くもあらぬ青山を目がけ昔の江戸図をたよりにしてその寺を捜しに行つた事がある。寺は青山練兵場れんぺいじようを横切つて兵營の裏手なる千駄ヶ谷せんだの一隅に残つていたが、堂宇は見るかげもなく改築せられ、境内狭しと建てられた貸家かしやに、松は愚か庭らしい閑地あきちさえ見当らなかつた。この近くに山の手の新日暮里しんにつぱりといわれて、日暮里の花見寺はなみでらに比較せられた仙寿院せんじゆいんの名園ある事は、これも『江戸名所図絵えどめいしよずえ』で知つてゐる処から、日和下ひより

駄^{げた}の歩きついでに尋^{たず}ねあてて見れば、古びた惣門^{そうもん}を潜^{くぐ}つて登る石段の両側に茶の木の美しく刈込まれたるに辛^{から}くも昔を忍ぶのみ。庭は跡方^{あとかた}もなく伐開^{きりひら}かれ本堂の横手の墓地も申訳らしく僅^{わず}な地坪^{じつぽ}を残すばかりであつた。

今日^{こんにち}上野博物館の構内に残っている松は寛永寺^{かんえいじ}の旭^{あさひ}の松または稚児^{ちご}の松とも称せられたものとやら。首尾の松は既に跡なけれど根岸にはなお御行の松の健なるあり。麻布本^ほ村^{むら}町の曹溪寺^{そうけいじ}には絶江^{ぜつこう}の松^{まつ}、二本榎高野山^{にほんえのきこうやさん}には独鈷^{どっこ}の松^{まつ}と称せられるものがある。その形古^{かた}き絵に比べ見て同じようなればいずれも昔のままのものであらう。

柳は桜と共に春来ればこきまぜて都の錦を織成^{おりな}すもの故、市中^{しちゆう}の樹木を愛するもの決してこれを閑^{かんきやく}却する訳には行くまい。桜には上野の秋色^{しゆうしきぎくら}、桜、平川^{ひらかわ}天神^{てんじん}の鬱^う金の桜、麻布^{こうが}筭町^{しんちゆう}長谷^{ちやうこくじ}寺の右衛門桜^{うゑもんぎくら}、青山梅窓院^{ばいそうゐん}の拾^{ひろ}桜^{いぎくら}、また今日はありやなしや知らねど名所絵にて名高き渋谷の金王^{こんのうぎくら}桜、柏木^{かしわぎ}の右衛門桜、あるいはまた駒込吉祥寺^{こまごめきちじやうじ}の並木^{なみき}の桜の如く、来歴あるものを捜むれば数多^{あまた}あらうが、柳に至つてはこれといつて名前のあるものは殆どないようである。

隋^{ようだい}の煬帝^{ちやうあん}長安^{けんじん}に顕仁宮^{けんじんきゆう}を営むや河南^{いとな}に済渠^{かん}を開き堤に柳を植うる事一千三

百里という。金殿玉楼その影を緑波に流す処春風に柳絮は雪と飛び黄葉は秋風に菲々として舞うさまを想見れば宛ら青貝の屏風七宝の古陶器を見る如き色彩の眩惑を覚ゆる。けだし水の流に柳の糸のなびきゆらめくほど心地よきはない。東都柳原の土手には神田川の流に臨んで、筋違の見附から浅草見附に至るまで々々として柳が生茂っていたが、東京に改められると間もなく堤は取崩されて今見る如き赤煉瓦の長屋に変つてしまった。土手を取崩したのは『武江年表』によれば明治四年四月またここに供長家を立てたのは明治十二、三年頃である。

柳橋に柳なきは既に柳北先生『柳橋新誌』に「橋以柳為名而不植一株之柳〔橋は柳を以て名と為すに、一株の柳も植えず〕」とある。しかして両国橋よりやや川下の溝に小橋あつて元柳橋といわれここに一樹の老柳ありしは柳北先生の同書にも見えまた小林清親翁が東京名所絵にも描かれてある。図を見るに川面籠る朝霧に両国橋薄墨にかすみ渡りたる此方の岸に、幹太き一樹の柳少しく斜になりて立つ。その木蔭に縞の着流の男一人手拭を肩にし後向きに水の流れを眺めている。閑雅の趣自ら画面に溢れ何となく猪牙舟の艣声と鷗の鳴く音さえ聞き得るような心地がする。かの柳はいつの頃枯れ朽ちたのであろう。今は河岸の様子も変り小流も埋立てられてしま

つたので元柳橋の跡も尋ねにくい。

半蔵御門より

外桜田の堀あるいはまた日比谷馬場先和田倉御門外へかけての堀

端には一斉に柳が植つていて処々に水撒の車が片寄せてある。この柳は恐らく明治になつてから植えたものであろう。広重が東都名勝の錦絵の中外桜田の景を看ても堀端の往

来際には一本の柳とても描かれてはいない。土手を下りた水際の柳の井戸の所に唯一株の柳があるばかりである。余の卑見を以てすれば、水を隔てて対岸なる古城の石垣と

老松を望まんには、此方の堤に柳あるは眺望を遮りまた眼界を狭くするの嫌あるが故にむしろなきに如くはない。いわんやかかる処に西洋風の楓の如きを植うるにおいてをや。

東京市は頻に西洋都市の外観に倣わんと欲して近頃この種の楓または橡の類を各区の路傍に植付けたが、その最も不調和なるは赤坂紀の国坂の往来に越す処はあるまい。赤坂離宮のいかにも御所らしく京都らしく見える筋堀に対して異国種の楓の並木は何たる突飛ぞや。山の手の殊に堀近き処の往来には並木の用は更にならない。並木の緑なくとも山の手一帯には何処という事なく樹木が目につく。並木は繁華の下町において最も効能がある。銀座駒形人形町通の柳の木かげに夏の夜の露店賑う有様は、煽風器なくとも天然の涼風自在に吹通う星の下なる一大勸工場にひとしいではないか。

都下の樹木にして以上の外ほかなお有名なるは青山練兵場内のナンジャモンジャの木、本ほんご
 郷うにかたまち西片町 阿部伯爵家の椎しい、同区 弓ゆみちよう町の大樟おおくすのき、芝三田蜂須賀侯爵邸の椎などが
 ある。煩わづらわしければ一々述べず。

第四 地図

蝙蝠傘こうもりがさを杖ひよりげたに日和下駄ひきずを曳摺ひきずりながら市中しちゆうを歩む時、私はいつも携帯に便かえいなる嘉
永板ばんの江戸切図えどきりずを懐中ふところにする。これは何も今時出版する石版摺せきばんずりの東京地図を嫌ことさらつて
殊ことさら更昔ことさらの木版絵図を慕うというわけではない。日和下駄曳摺ひきずりながら歩いて行く現代の
街路をば、歩きながらに昔の地図に引合せて行けば、おのずから勞せずして江戸の昔と東
京の今とを目まのあたり比較対照する事ができるからである。

例えば牛込うしごめ弁天べんてん町ちやうへん辺は道路取りひろげのため近頃全く面目こことを異にしたが、その裏
通らどおりなる小流こながれに今なおその名を残す根来橋ねごろばしという名前なぞから、これを江戸切図に
引合せて、私は歩きながらこの辺へんに根来組同心ねごろぐみどうしんの屋敷のあつた事を知る時なぞ、歴史上
の大発見でもしたように訳もなくむやみと嬉しくなるのである。かような馬鹿馬鹿しい無
益な興味の外ほかに、また一ツ昔の地図の便利な事は雪月花せつげつかの名所や神社仏閣の位置をば殊
更目につきやすいように色摺いろずりにしてあるのみならず時としては案内記のようにこの処よ
り何々まで凡およそ幾いくちやう町植木屋多しなぞと説明が加えてある事である。凡そ東京の地図に

して精密正確なるは陸地測量部の地図に優るものはなからう。しかしこれを眺めても何らの興味も起らず、風景の如何をも更に想像する事が出来ない。土地の高低を示す蚰蜒の足のような符号と、何万分の一とか何とかいう尺度一点張の正確と精密とはかえって当意即妙の自由を失い見る人をして唯煩雑の思をなさしめるばかりである。見よ不正確なる江戸絵図は上野の如く桜咲く処には自由に桜の花を描き柳原の如く柳ある処には柳の糸を添え得るのみならず、また飛鳥山より遠く日光筑波の山々を見ることを得れば直にこれを雲の彼方に描示すが如く、臨機応変に全く相反せる製図の方式態度を併用して興味津々よく平易にその要領を会得せしめている。この点よりして不正確なる江戸絵図は正確なる東京の新地図よりも遙に直感的また印象的方法に出でたものと見ねばならぬ。現代西洋風の制度は政治法律教育万般のこと尽くこれに等しい。現代の裁判制度は東京地図の煩雑なるが如く大岡越前守の眼力は江戸絵図の如し。更に語を換ゆれば東京地図は幾何学の如く江戸絵図は模様のようなものである。

江戸絵図はかくて日和下駄蝙蝠傘と共に私の散歩には是非ともなくてはならぬ伴侶となった。江戸絵図によつて見知らぬ裏町を歩み行けば身は自らその時代にあるが如き心持となる。實際現在の東京中には何処に行くとも心より恍惚として去るに忍びざるほど美麗

なもしくは莊嚴な風景建築に出遇わぬかぎり、いろいろと無理な方法を取りこれによつて纔に幾分の興味を作出さねばならぬ。然らざれば如何に無聊なる閑人の身にも現今の東京は全く散歩に堪えざる都会ではないか。西洋文学から得た輸入思想を便りにして、例えば銀座の角のライオンを以て直ちに巴里のカッフェーに擬し帝國劇場を以てオペラになぞらえるなど、むやみやたらに東京中を西洋風に空想するのも或人にはあるいは有益にして興味ある方法かも知れぬ。しかし現代日本の西洋式偽文明が森永の西洋菓子に如く女優のダンスの如く無味拙劣なるものと感じられる輩に対しては、東京なる都会の興味は勢尚古的退歩的たらざるを得ない。われわれは市ヶ谷外濠の埋立工事を見て、いかにするとも将来の新美観を予測することの出来ない限り、愛惜の情は自ら人をしてこの堀に藕花の馥郁とした昔を思わしめる。

私は四谷見附を出てから迂曲した外濠の堤の、丁度その曲角になつてゐる本村町の坂上に立つて、次第に地勢の低くなり行くにつれ、目のとどくかぎり市ヶ谷から牛込を経て遠く小石川の高台を望む景色をば東京中での最も美しい景色の中に数えている。市ヶ谷八幡の桜早くも散つて、茶の木稲荷の茶の木の生垣伸び茂る頃、濠端づたいの道すがら、行手に望む牛込小石川の高台かけて、緑滴る新樹の梢に、ゆらゆらと初夏の

雲涼し氣に動く空を見る時、私は何のいわれもなく山の手のこの辺を中心にして江戸の狂歌が勃興した天明時代の風流を思起すのである。『狂歌才蔵集』夏の巻にいわずや、

首夏

馬場金埒

花はみなおろし大根となりぬらし鯉に似たる今朝の横雲

新樹

紀躬鹿

花の山にほひ袋の春過ぎて青葉ばかりとなりにけるかな

更衣

地形方丸

夏たちて布子の綿はぬきながらたもとにのこる春のはな昏

江戸の東京と改称せられた当時の東京絵図もまた江戸絵図と同じく、わが日和下駄の散歩に興味を添えしむるものである。

私は小石川なる父の家の門札に、第四大区第何小区何町何番地と所書の上してあつ

たのを記憶している。東京府が今日の如く十五区六郡に区劃されたのは、丁度私の生れた頃のこと。それまでは十一の大区に分たれていたのである。私は柳北の随筆、芳幾の錦絵、清親の名所絵、これに東京絵図を合せ照してしばしば明治初年の渾沌たる新時代の感覚に触るる事を樂しみとする。

市中を散歩しつつこの年代の東京絵図を開き見れば諸処の重立つた大名屋敷は大抵海陸軍の御用地となつている。下谷佐竹の屋敷は調練場となり、市ヶ谷と戸塚村なる尾州侯の藩邸、小石川なる水戸の館第も今日われわれの見る如く陸軍の所轄となり名高き庭苑も追々に踏み荒されて行く。鉄砲洲なる白河樂翁公が御下屋敷の浴恩園は小石川の後樂園と並んで江戸名苑の一に数えられたものであるが、今は海軍省の軍人ががやがや寄集つて酒を呑む俱樂部のようなものになつてしまつた。江戸絵図より目を転じて東京絵図を見れば誰しも仏蘭西革命史を読むが如き感に打たれるであろう。われわれはそれよりも時としては更に深い感慨に沈められるといつてもよい。何故なれば、仏蘭西の市民は政變のために軽々しくヴェルサイユの如きルウブルの如き大なる国民的美術的建築物を壊ちはしなかつたからである。現代官僚の教育は常に孔孟の教を尊び忠孝仁義の道を説くと聞いているが、お茶の水を過る度々「仰高」の二字を掲げ

た大成殿たいせいでんの表門を仰げば、瓦は落ちたるままに雑草も除かず風雨の破壊するがままに任せてある。しかして世人の更にこれを怪しまざるが如きに至っては、われらは唯啞然あぜんたるより外ほかはない。

第五 寺

杖^{つえ}のかわりの蝙蝠傘^{こうもりがさ}と共に私が市中^{しちゆう}散歩の道しるべとなる昔の江戸切絵図^{えどぎりえず}を開き見れば江戸中には東西南北到る処^{おびただ}に夥しく寺院神社の散在していた事がわかる。江戸の都会より諸侯の館邸^{ぶけ}と武家の屋敷と神社仏閣を除いたなら残る処の面積は殆どない位^{くらゐ}であろう。明治初年神仏の区別^{ぶんめい}を分明^{ぶんめい}にして以来殊には近年に至つて市区改正のため仏寺の取扱いとなつたものは尠^{すくな}くない。それにもかかわらず寺院は今なお市中何処^{いずこ}という限りもなく、あるいは坂の上崖^{がけ}の下、川のほとり橋の際^{きわ}、到る処にその門と堂の屋根を聳^{そび}している。一箇所大きい寺のあるあたりには塔^{たつちゆう}中^{ちゆう}また寺中^{じちゆう}と呼ばれて小さい寺が幾軒も続いている。そして町の名さえ寺町^{てらまち}といわれた処は下谷浅草^{したやあさくさ}牛込^{うしごめ}四谷芝^{よつやしば}を始め各区に渡つてこれを見出すことが出来る。私は目的なく散歩する中おのずからこの寺の多い町の方へとのみ日和下駄^{ひよりげた}を曳摺^{ひきず}つて行く。

上野寛永寺^{うえのかんえいじ}の楼閣は早く兵火に罹^かり芝増上寺^{しばぞうじようじ}の本堂も祝融^{しゆくゆう}の災に遭^あう事再三。谷中天王寺^{やなかくてんのうじ}は僅^{わず}に傾ける五重塔に往時の名残を留むるばかり。本所羅漢寺^{ほんじよらかんじ}の螺堂^{さざえどう}。

も既に頽廢し内なる五百の羅漢のみ幸に移されてその大半を今や郊外目黒の一寺院に見る。かくては今日東京市中の寺院にして輪奐の美人目を眩惑せしむるものは僅に浅草の観音堂音羽護国寺の山門その他二、三に過ぎない。歴史また美術の上よりして東京市中の寺院がさしたる興味を牽かないのは当然の事である。私は秩序を立てて東京中の寺院を歴訪しようという訳でもなく、また強いて人の知らない寺院をさがし出そうと企てている訳でもない。私は唯古びた貧しい小家つづきの横町などを通り過る時、ふと路のほとりに半ば崩れかかった寺の門を見付けてああこんな処にこんなお寺があったのかと思ひながら、そつとその門口から境内を窺い、青々とした苔と古池に茂った水草の花を見るのが何となく嬉しいというに過ぎない。京都鎌倉あたりの名高い寺々を見物するのは異つて、東京市中に散在したつまらない寺にはまた別種の興味がある。これは単独に寺の建築やその歴史から感ずる興味ではなく、いわば小説の叙景もしくは芝居の道具立を見るような興味に似ている。私は本所深川辺の堀割を散歩する折々汐の水が低い岸から往來まで溢れかかつて、荷船や肥料船の咎が貧家の屋根よりもかえって高く見える間からふと彼方に巍然として聳ゆる寺院の屋根を望み見る時、しばしば黙阿弥劇中の背景を想い起すのである。

かくの如き溝泥臭い堀割と腐った木の橋と肥料船や芥船や棟割長屋なぞから成立つ陰惨な光景中に寺院の屋根を望み木魚と鐘とを聞く情趣は、本所と深川のみならず浅草下谷辺においてもまた変る処がない。私は今近世の社会問題からは全く隔離して仮に単独な絵画的詩興の上からのみかかる貧しい町の光景を見る時、東京の貧民窟には竜動や紐育において見るが如き西洋の貧民窟に比較して、同じ悲惨な中にも何処となくいふべからざる静寂の気が潜んでいるように思われる。尤も深川小名木川から猿江あたりの工場町は、工場の建築と無数の煙筒から吐く煤烟と絶間なき機械の震動とによりて、やや西洋風なる余裕なき悲惨なる光景を呈し来ったが、今然らざる他の場所の貧しい町を窺うに、場末の路地や裏長屋には仏教的迷信を背景にして江戸時代から伝襲し来たそのまゝなる日蔭の生活がある。怠惰にして無責任なる愚民の疲労せる物哀れな忍従の生活がある。近來一部の政治家と新聞記者とは各自党派の勢力を張らんがために、これらの裏長屋にまで人権問題の福音を強いようと急り立っている。さればやがて数年の後は法華の団扇太鼓や百万遍の声全く歇み路地裏の水道共用栓の周囲からは人権問題と労働問題の喧しい演説が聞かれるに違いない。しかし幸か不幸かいまだ全く文明化せられざる今日においてはかかる裏長屋の路地内には時として巫女が梓弓の歌も聞かれ

る。清元きよもとも聞かれる。孟蘭盆もうらんぼんの燈籠とうろうや果敢はかない迎火むかいびの烟けむりも見られる。彼らが江戸の専制時代から遺伝し来ったかくの如き果敢はかない裏淋あきしい諦めあきらめの精神修養が漸次ぜんじ新時代の教育その他のために消滅し、徒に覚醒いたずらと反抗の新空氣に触れるに至ったならば、私はその時こそ真に下層社会の悲惨な生活が開始せられるのだ。そして政治家と新聞記者とが十分に私欲を満す時が来るのだと信じている。いつの世にか弱いものの利を得た時代があらう。弱い者が自らみづかその弱い事を忘れ軽々しく浮薄なる時代の声に誘惑されようとするのは、誠に外よその見る目も痛ましい限りといわねばならぬ。

私は敢て自分一家の趣味ばかりのために、古寺ふるでらと荒れた墓場とその附近なる裏屋の貧しい光景とを喜ぶのではない。江戸専制時代の迷信と無智とを伝承した彼らが生活の外形に接して直ちにこれを我が精神修養の一助になさんと欲するのである。實際私は下谷浅草本所深川あたりの古寺の多い溝際どぶぎわの町を通る度々、見るもの聞くものから幾多の教訓と感慨とを授けられるか知れない。私は日進月歩する近世医学の効験こうけんを信じないのでは決してない。電気治療もラヂウム鉱泉の力をもあながち信用しないのではない。しかし私はここに不衛生なる裏町に住んでいる果敢はかない人たちが今なお迷信と煎藥せんじやくすりとにその生命せいめいを托しこの世を夢と簡単にあきらめをつけている事を思えば、私は医学の進歩しな

つた時代の人々の病苦災難に対する態度の泰然たると、その生活の簡易なるとに対して深く敬慕の念なきを得ない。およそ近世人の喜び迎えて「便利」と呼ぶものほど意味なきものはない。東京の書生がアメリカ人の如く万年筆を便利として使用し始めて以来文学に科学にどれほどの進歩が見られたであろう。電車と自動車とは東京市民をして能く時間の節儉を実施させているのであろうか。

私はかように好んで下町したまちの寺とその附近の裏町を尋ねて歩くと共にまた山の手の坂道に臨んだ寺をも決して閑却しない。山の手の坂道はしばしばその麓ふもとに聳え立つ寺院の屋根樹木と相俟あいまつて一幅の好画図こうがとをつくることがある。私は寺の屋根を眺めるほど愉快なことはない。怪異なる鬼瓦おにがわらを起点として奔流の如く傾斜する寺院の瓦屋根はこれを下から打仰うちあおぐ時も、あるいはこれを上から見下す時も共に言うべからざる爽快の感を催もよおさせる。近来日本人は土木こつの工を起すごとに力めて欧米各国の建築を模倣つとせんとしているが、私の目にはいまだ一ツとして寺観の屋根を仰ぐが如き雄大なる美感を起させたものはない。新時代の建築に対するわれわれの失望は啻ただに建築の様式のみに留まらず、建築と周囲の風景樹木等の不調和なる事である。現代人の好んで用ゆる煉瓦あかいろの赤色と松杉の如き植物の濃く強い緑色りよくしよくと、光線の烈しき日本固有の藍色らんしよくの空とは何たる永遠の不調和である

う。日本の自然は尽く強い色彩を持っている。これにペンキあるいは煉瓦^{れんが}の色彩を対峙せしめるのは余りに無謀といわねばならぬ。試に寺院^{こころみ}の屋根と廂^{ひさし}と廻廊を見よ。日本寺院の建築は山に河に村に都に、いかなる処においても、必ずその周囲の風景と樹木と、また空の色とに調和して、ここに特色ある日本固有の風景美を組織している。日本の風景と寺院の建築とは、両々^{りょうりょう}相俟^{あひま}つて全く引離すことが出来ないほどに混和している。京都宇治奈良宮島日光等の神社仏閣とその風景との関係は、暫らくこれを日本旅行者の研究に任せ、私はここにそれほど誇るに足らざる我が東京市中のものについてこれを観^みよう。

不忍^{しのばす}の池^{いけ}に泛^{うか}ぶ弁天堂とその前の石橋^{いしばし}とは、上野の山を蔽^{おほ}う杉と松とに對して、または池一面に咲く蓮^{はすのはな}花に對して最もよく調和したものではないか。これらの草木^{そうもく}とこの風景とを眼前に置きながら、殊^{ことごと}更に西洋風の建築または橋梁を作つて、その上から蓮の花や緋鯉^{ひぎい}や亀の子などを平気で見てゐる現代人の心理は到底私には解釈し得られぬ処である。浅草觀音堂とその境内^{けいだい}に立つ銀杏^{いちょう}の老樹、上野の清水堂と春の桜秋の紅葉^{もみじ}の対照もまた日本固有の植物と建築との調和を示す一例である。

建築は元より人工^{もと}のものなれば風土氣候の如何^{いかん}によらず亜細亜^{アジヤ}の土上に歐羅巴^{ヨーロッパ}の塔を建^{たつ}るも容易であるが、天然の植物に至つては人意のままに猥^{みだり}にこれに移し植えることは

出来ない。無情の植物はこの点において最大の芸術家哲学者よりも遙はるかによく己れを知っている。私は日本人が日本の国土に生ずる特有の植物に対して最少もすこし深厚なる愛情を持つていたなら、たとえ西洋文明を模倣するにしても今日の如く故国の風景と建築とを毀損きそんせず済んだであろうと思つてゐる。電線を引くに不便なりとて遠慮えしやく会え積せきもなく路傍ろぼうの木を伐きり、または昔からなる名所めいしよの眺望や由緒ゆいしよのある老樹にも構わずむやみやたらに赤煉瓦の高い家を建てる現代の状態は、実に根柢こんていより自国の特色と伝来の文明とを破却はきやくした暴挙といわねばならぬ。この暴挙あるがために始めて日本は二十世紀の強国になつたというならば、外觀上の強国たらんがために日本はその尊き内容を全く犠牲にしてしまつたものである。

私は上野博物館の門内に入る時、表慶館ひょうけいかんの傍かたわらに今なお不思議にも余命を保つてゐる老松の形と赤煉瓦の建築とを対照して、これが日本固有の貴重なる古美術を収めた宝庫かと誠に奇異なる感に打たれる。日本橋にほんばしの大通おおどおりを歩いて三井三越を始めこの辺へんに競うて立つアメリカ風の高い商店を望むごとに、私はもし東京市の実業家が真に日本橋といするがちよう駿河町と呼ぶ名称の何たるかを知りこれに対する伝説の興味を感じていたなら、繁華な市しちゆう中ちゆうからも日本晴にほんばれの青空遠く富士山を望み得たという昔の眺望の幾分を保存させたで

あろうと愚にもつかぬ事を考え出す。私は外濠の土手に残った松の木をば雪の朝月の夕、折々の季節につれて、現今の市中第一の風景として悦ぶにつけて、近頃四谷見附内に新築された大きな赤い耶蘇の学校の建築をば心の底から憎まねばならぬ。日常かかる不調和な市街の光景に接した目を転じて、一度市内に残された寺院神社を訪えばいかにつまらぬ堂宇もまたいかに狭い境内も私の心には無限の慰藉を与えずにはいない。

私は市中の寺院や神社をたずね歩いて最も幽邃の感を与えられるのは、境内に進入つて近く本堂の建築を打仰ぐよりも、路傍に立つ惣門を潜り、彼方なる境内の樹木と本堂鐘楼等の屋根を背景にして、その前に聳える中門または山門をば、長い敷石道の此方から遠く静に眺め渡す時である。浅草の観音堂について論ずれば雷門は既に焼失せしてしまったが今なお残る二王門をば仲店の敷石道から望み見るが如き光景である。あるいはまた麻布広尾橋の袂より一本道の端れに祥雲寺の門を見る如き、あるいは芝大門の辺より道の両側に塔中の寺々叢を連ぬるその端れに当って遙に朱塗の楼門を望むが如き光景である。私はかくの如き日本建築の遠景についてこれをば西洋で見た巴里の凱旋門その他の眺望に比較すると、氣候と光線の関係故か、唯何とはなしに日本の遠景は平たく見えるような心持がする。この点において歌川豊春らの描いた浮絵の遠

景木板画にはどうかすると真しんによくこの日本的感情を示したものがある。

私は適度の距離から寺の門を見る眺望と共にまた近寄つて扉の開かれた寺の門をそのままの額縁がくぶちにして境内を窺うかがい、あるいはまた進み入つて境内よりその門外を顧かえりみる光景に一段の画趣を覚える。既に『大窪おおくぼだより』その他の拙著において私は寺の門口もんぐちからその内外を見る景色の最も面白きは浅草の二王門及び隨身門ずいじんもんである事を語つた。然されば今更ここにその興味を繰返して述べる必要はない。

寺の門はかくの如く本堂の建築とは必ず適度の距離に置かれ、境内に入るものをしてその眺望よりして自ら敬度おのずか けいけんの心を起さしめるように造られてある。寺の門は宛さながら西洋管絃樂の序曲プレリユードの如きものである。最初に惣門そうもんありその次に中門ちゅうもんあり然る後幽邃なる境内あつてここに始めて本堂が建てられるのである。神社について見るもまず鳥居とりいあり次に楼門あり、これを過ぎて始めて本殿に到る。皆相応の距離が設けられてある。この距離あつて始めて日本の寺院と神社の威厳が保たれるのである。されば寺院神社の建築を美術として研究せんと欲するものは、単独にその建築を觀みるに先立って、広く境内の敷地全体敷地全体の設計並びにその地勢から觀察して行かねばならぬ。これ既にゴンスやミジヨンの如き日本美術の研究者また旅行者の論ずるが如く、日本寺院の西洋ことと異なる所以ゆえんである。西洋の

寺院は大抵単独に路傍ろぼうに屹立きつりつしているのみであるが、日本の寺院に至っては如何なる小さな寺といえども皆門みなを控えている。芝増上寺しばぞうじようじの楼門ろうもんをしてかくの如く立派に見せようがためにはその門前なる広い松原が是非とも必要になつて来るであらう。麴町日枝神社じんじや さんもんの山門さんもんの甚だ幽邃ゆうすいなる理由を知らんには、その周囲なる杉の木立のみならず、前に控えた高い石段の有無うむをも考えねばなるまい。日本の神社と寺院とはその建築と地勢と樹木との寔まことに複雑なる綜合美術である。されば境内の老樹にしてみもしその一株いつしゆを枯死こしせしむれば、全体より見て容易に修繕しがたき破損きたを来さしめた訳である。私はこの論法により更に一步を進めて京都奈良の如き市街は、その貴重なる古社寺の美術的効果に對して広く市街全体をもその境内に同じきものとして取扱わねばならぬと思つてゐる。即ちかかる市街の停車場旅館官衙学校等ていしやば かんが とうは、その建築の体裁も出来得る限りその市街の生命たる古社寺の風致と歴史とを傷けぬよう、常に慎重なる注意を払うべき必要があつた。しかるに近年見る所の京都の道路家屋並に橋梁の改築工事の如きは全く吾人ごじんの意表に出でたものである。日本いかに貧国たりとも京都奈良の二旧都をそのままに保存せしめたりとて、もしそれだけの埋合せとして新領土の開拓に努むる処あらば、一国全体の商工業より見て、さしたる損害を来す訳でもあるまい。眼前の利にのみ齷齪あくせくして世界に二つとない自国の

宝の値踏ねづみをする暇いとまさえないと、あまりに小国しょうこくじん人の面目を活躍させ過ぎた話である。思わず畠はたけ違いへ例の口癖とはいいいながら愚痴ぐちが廻り過ぎた。世の中はどうでも勝手に棕しゅうろ櫛ぼうき。私は自分勝手に唯一人日和下駄ひよりげたを曳ひきずりながら黙もくつて裏町を歩いていればよかったのだ。議論はよそう。皆様が御退屈だから。

第六 水 附渡船

フランス人エミル・マンユの著書『都市美論』の興味ある事は既にわが随筆『大窪だより』の中に述べて置いた。エミル・マンユは都市に対する水の美を論ずる一章において、広く世界各国の都市とその河流及び江湾の審美的関係より、更に進んで運河沼沢噴水橋梁等の細節にわたってこれを説き、なおその足らざる処を補わんがために水流に映ずる市街燈火の美を論じている。

今試に東京の市街と水との審美的関係を考うるに、水は江戸時代より継続して今日においても東京の美観を保つ最も貴重なる要素となっている。陸路運輸の便を欠いていた江戸時代にあつては、天然の河流たる隅田川とこれに通ずる幾筋の運河とは、いうまでもなく江戸商業の生命であつたが、それと共に都会の住民に対しては春夏秋冬の娯樂を与え、時に不朽の価値ある詩歌絵画をつくらしめた。しかるに東京の今日市内の水流は単に運輸のためのみとなり、全く伝来の審美的価値を失うに至った。隅田川はいうに及ばず神田のお茶の水本所の豎川を始め市中の水流は、最早や現代のわれわれには昔の人が船

宿の棧橋から猪牙船に乗って山谷に通り柳島に遊び深川に戯れたような風流を許さず、また釣や網の娯楽をも与えなくなつた。今日の隅田川は巴里におけるセーヌ河の如き美麗なる感情を催さしめず、また紐育のホドソン、倫敦のテムスに對するが如く偉大なる富国の壯觀をも想像させない。東京市の河流はその江灣なる品川の入海と共に、さして美しくもなく大きくもなくまたさほどに繁華でもなく、誠に何方つかずの極めてつまらない景色をなすに過ぎない。しかしそれにもかかわらず東京市中の散歩において、今日なお比較的興味あるものはやはり水流れ船動き橋かかる処の景色である。

東京の水を論ずるに當つてまずこれを區別して見るに、第一は品川の海灣、第二は隅田川中川六郷川の如き天然の河流、第三は小石川の江戸川、神田の神田川、王子の音無川の如き細流、第四は本所深川日本橋京橋下谷浅草等市中繁華の町に通ずる純然たる運河、第五は芝の桜川、根津の藍染川、麻布の古川、下谷の忍川の如きその名のみ美しき溝渠、もしくは下水、第六は江戸城を取巻く幾重の濠、第七は不忍池、角筈十二社の如き池である。井戸は江戸時代にあつては三宅坂側の桜ケ井、清水谷の柳の井、湯島の天神の御福の井の如き、古来江戸名所の中に数えられたものが多かったが、東京になつてから全く世人に忘れられ所在の地さえ大抵は不明とな

つた。

東京市はかくの如く海と河と堀と溝と、仔細に觀察し来ればそれら幾種類の水——即ち流れ動く水と淀んで動かぬ死したる水とを有する頗る變化に富んだ都会である。まず品川の入海を眺めんにここは目下なお築港の大工事中であれば、将来如何なる光景を呈し来るや今より予想する事はできない。今日までわれわれが年久しく見馴れて来た品川の海は僅に房州通の蒸汽船と円ツこい達磨船を曳動す曳船の往来する外、東京なる大都会の繁榮とは直接にさしたる関係もない泥海である。潮の引く時泥土は目のとどく限り引続いて、岸近くには古下駄に炭俵、さては皿小鉢や椀のかけらに船虫のうようよと這寄るばかり。この汚い溝のような沼地を掘返しながら折々は沙蚕取りが手桶を下げて沙蚕を取っている事がある。遠くの沖には彼方此方に濤や粗朶が突立っているが、これさえ岸より眺むれば塵芥かと思われ、その間に泛ぶ牡蠣舟や苔取の小舟も今は唯強いて江戸の昔を追回しようとする人の眼にのみ聊かの風趣を覚えさせるばかりである。かく現代の首府に対しては実用にも裝飾にも何にもならぬこの無用なる品川灣の眺望は、彼の八ツ山の沖に並んで泛ぶこれも無用なる御台場と相俟って、いかにも過去った時代の遺物らしく放棄された悲しい趣を示している。天氣のよい時白帆や浮雲と共に望み得ら

れる安房上総の山影とても、最早や今日の都会人には彼の花川戸助六が台詞にも読込まれているような爽快な心持を起させはしない。品川湾の眺望に対する興味は時勢と共に全く湮滅してしまつたにかかわらず、その代りとして興るべき新しい風景に対する興味は今日においてはいまだ成立たずにいるのである。

芝浦の月見も高輪の二十六夜待も既になき世の語草である。南品の風流を伝えた楼台も今は唯不潔なる娼家に過ぎぬ。明治二十七、八年頃江見水蔭子がこの地の娼婦を材料として描いた小説『泥水清水』の一篇は当時硯友社の文壇に傑作として批評されたものであつたが、今よりして回想すれば、これすら既に遠い世のさまを描いた物語のような気がしてならぬ。

かく品川の景色の見捨てられてしまつたのに反して、荷船の帆柱と工場の煙筒の叢り立つた大川口の光景は、折々西洋の漫画に見るような一種の趣味に照して、この後とも案外長く或一派の詩人を悦ばす事が出来るかも知れぬ。木下杢太郎 北原白秋 諸家の或時期の詩篇には築地の旧居留地から月島永代橋あたりの生活及びその風景によつて感興を發したらしく思われるものが尠くなかつた。全く石川島の工場を後にして幾艘となぐ帆柱を連ねて碇泊するさまざま日本風の荷船や西洋形の帆前船を見ればおのずと

特種の詩情が催^{もよお}される。私は永代橋を渡る時活動するこの河口^{かわぐち}の光景に接するやドオデエがセエン河を往復する荷船の生活を描いた可憐^{かれん}なる彼の『ラ・ニベルネエズ』の一小篇を思出すのである。今日の永代橋には最早や辰巳^{たつみ}の昔を回想せしむべき何物もない。さるが故に、私は永代橋の鉄橋をばかえつてかの吾妻橋^{あずまばし}や両国橋^{りやうこくばし}の如くに醜^{みに}くいとは思わない。新しい鉄の橋はよく新しい河口^{かこう}の風景に一致している。

私が十五、六歳の頃であつた。永代橋の河^{かわ}下には旧幕府の軍艦が一艘商船学校の練習船として立^{たち}腐^{ぐさ}れのままに繋がれていた時分、同級の中学生といつものように浅草橋^{あさくさばし}の船宿^{こぶね}から小舟を借りてこの辺^{へん}を漕^こぎ廻り、河^{かわ}中に碇泊^{かくなか}している帆前船を見物して、こわい顔した船長から椰子^{やし}の実を沢山貰^{もら}つて帰つて来た事がある。その折私たちは船長がこの小さな帆前船^{あやつ}を操^{あやつ}つて遠く南洋まで航海するのだという話を聞き、全くロビンソンの冒険談を読むような感に打たれ、将来自分たちもどうかしてあのような勇猛なる航海者になりたいと思つた事があつた。

やはりその時分の話である。築地^{つきじ}の河岸^{かし}の船宿^{せんじ}から四挺^{しちようろ}艀^{くだ}のボートを借りて遠く千住^{せんじ}の方まで漕^こぎ上^{のぼ}つた帰り引^ひ汐^{きし}につれて佃^{つく}島^{くじま}の手前まで下^{くだ}つて来た時、突然向^むか

ら帆を上げて進んで来る大きな高瀬船に衝突し、幸いに一人も怪我はしなかったけれど、借りたボオトの小舷をば散々に破ってしまった上に櫂を一本折ってしまった。一同は皆親がかりのものばかり、船遊びをする事も家へは秘密にしていた位なので、私たちは船宿へ帰って万一破損の弁償金を請求したらどうしようかとその善後策を講ずるために、佃島の砂の上にボオトを引上げ浸水をかい出しながら相談をした。その結果夜暗くなってから船宿の棧橋へ船を着け、宿の亭主が舷の大破損に気のつかない中一同一目散に逃げ出すがよかろうという事になった。一同はお浜御殿の石垣下まで漕入ってから空腹を我慢しつつ水の上の全く暗くなるのを待ち船宿の棧橋へ上るが否や、店に預けて置いた手荷物を奪うように引摺み、めいめい後をも見ず、ひた走りに銀座の大通りまで走って、漸と息をついた事があった。その頃には東京府府立の中学校が築地にあったのでその辺の船宿では釣船の外にボオトをも貸したのである。今日築地の河岸を散歩しても私ははつきりとその船宿の何処にあつたかを確めることが出来ない。わずか二十年前なる我が少年時代の記憶の跡すら既にかくの如くである。東京市街の急激なる変化はむしろ驚くの外はない。

おおかわすじ
大川筋 一帯の風景について、その最も興味ある部分は今述べたように、永代橋河口の

眺望を第一とする。吾妻橋あずまばし 両国橋りやうこくばし 等の眺望は今日の処あまりに不整頓にして永代橋
 におけるが如く感興を一所に集注する事が出来ない。これを例するに浅野セメント会社の
 工場と新大橋しんおおはしの向に残る古い火見櫓ひのみやぐらの如き、あるいは浅草蔵前の電燈会社と駒
 形堂たどうの如き、国技館こくぎかんと回向院えこういんの如き、あるいは橋場の瓦斯ガスと真崎稲荷まつさきいなりの老
 樹の如き、それら工業的近世の光景と江戸名所の悲しき遺蹟とは、いずれも個々別々に私
 の感想を錯乱させるばかりである。されば私はかくの如く過去と現在、即ち廃頽と進歩と
 の現象のあまりに甚しく混雜している今日の大川筋おほがわよりも、深川小名木川ふかがわおなぎがわより猿江裏さるえうらの
 如くあたりは全く工場地に変形し江戸名所の名残なごりも容易たやすくは尋ねられぬほどになった処を
 選ぶ。大川筋は千住せんじゆより両国に至るまで今日においてはまだまだ工業の侵略が緩漫かんまんに
 過ぎている。本所小梅ほんじよこめから押上辺おしあげへんに至る辺も同じ事、新しい工場町こうじようまちとしてこれを
 眺めようとする時、今となつてはかえつて柳島やなぎしまの妙見堂みょうけんどうと料理屋の橋本はしもととが目
 ざわりである。

運河の眺望は深川の小名木川辺に限らず、いずこにおいても隅田川の兩岸に対するより
 も一体にまとまつた感興を起させる。一例を挙げれば中洲なかずと箱崎町はこざきちようの出端でばなとの間に深

く突入^{つきい}っている堀割はこれを箱崎町の永久^{えいきゆう}橋^{うばし} または菖蒲^{しやうぶ}河岸^{がし}の女^{おんな}橋^{なばし} から眺めやるに水はあたかも入江の如く無数の荷船は部落の觀をなし薄暮風収まる時競^{きそ}つて炊烟^{すいえん}を棚^た曳^{なび}かすさま正^{まさ}に江南^{こうなん}沢^{たく}国^{こく}の趣をなす。凡^{すべ}て溝渠^{こうきよ}運河の眺望の最も變化に富みかつ活氣を帯びる処は、この中洲の水のように彼方^{かなた}此方^{こなた}から幾筋の細い流れがやや広い堀割を中心にして一個所に落合つて来る処、もしくは深川の扇^{おうぎ}橋^{ばし}の如く、長い堀割が互に交叉して十字形をなす処である。本所^{やなぎわら}柳^{しんつじ}原^{ばし}の新辻^{きようばし}橋^は、京橋^{きようばし}八丁堀^{はつちやうぼり}の白魚^{しらうお}橋^{ばし}、靈^れ岸^{いがん}島^{じま}の靈岸^{れいがん}橋^{ばし}あたりの眺望は堀割の水のあるいは分れあるいは合する処、橋は橋に接し、流れは流れと相^{あい}激^{げき}し、ややともすれば船は船に突当ろうとしている。私はかかる風景の中日本橋を背にして江戸橋の上より菱^{ひしがた}形^{がた}をなした広い水の片^{かた}側^{かわ}には荒布^{あらめ}橋^{ばし}つづいて思案^{しあん}橋^{ばし}、片側には鎧^{よろい}橋^{ばし}を見る眺望をば、その沿岸の商家倉庫及び街上^{きやうじやう}橋^{ばし}頭^{かう}の繁華^{ざつと}雑^{ざつ}沓^とと合せて、東京市内の堀割の中にて最も偉大なる壯觀を呈する処となす。殊^{さい}に歲暮^{さいぼ}の夜景の如き橋^き上^{じやう}を往来する車の灯^ひは沿岸の燈火と相乱れて徹^{てつ}宵^{しやう}水の上に揺^ゆらめ^{らめ}き動く有様銀座街頭の燈火より遙^{はるか}に美麗である。

堀割の岸には処^{しよ}々^{しよ}に物揚場^{ものあげば}がある。市^{しち}中^{ちゆう}の生活に興味を持つものには物揚場の光景もまたしばし杖^{とど}を留^{とど}むるに足りる。夏の炎天神田^{かんだ}の鎌倉^{かまくら}河岸^{がし}、牛込^{うしごめ}揚場^{あげば}の河岸などを

通れば、荷車の馬は馬方うまかたと共につかれて、河添かわぞいの大きな柳の木の下したに居眠りをしてい
る。砂利じやりや瓦かわつちや川土かわつちを積み上げた物蔭にはきまつて牛飯ぎゅうめしやすいとの露店が出てい
る。時には氷屋も荷を卸おろしている。荷車の後押しをする車力しやりきの女房は男と同じような身
仕度をして立ち働き、その赤児あかこをば捨児すてこのように砂の上に投出していると、その辺へんには瘦や
せた鶏が落ちこぼれた餌えさをもりつくして、馬の尻から馬糞ばふんの落ちるのを待っている。私
はこれらの光景に接すると、必北斎あるいはミレエを連想して深刻なる絵画的写実の感興
を誘いざない出され、自ら絵事みづかの心得なき事を悲しむのである。

以上河流かりゆうと運河の外なお東京の水の美に關しては処々の下水が落合つて次第に川の如
き流をなす溝川みぞかわの光景を尋ねて見なければならぬ。東京の溝川には折々可笑おかしいほど
事実と相違した美しい名がつけられてある。例えば芝愛宕しばあたごした下なる青松寺せいしょうじの前を流れる
下水を昔から桜川さくらがわと呼びまた今日では全く埋うずめつく尽された神田鍛冶町かじちようの下水を逢あいそ
初川めがわ、橋場総泉寺はしばそうせんじの裏手から真崎まつさきへ出る溝川を思おも川いがわ、また小石川金剛寺坂こいしかわこんごうじざかし
下の下水を人參川にんじんがわと呼ぶ類たぐいである。江戸時代にあつてはこれらの溝川も寺院の門前や
大名屋敷の堀外へいそとなど、幾分か人の目につく場所を流れていたような事から、土地の人に

はその名の示すが如き特殊の感情を与えたものかも知れない。しかし今日の東京になつては下水を呼んで川となすことすら既に滑稽なほど大袈裟である。かくの如くその名とその実との相伴わざる事は独り下水の流れのみに留まらない。江戸時代とまたその以前からの伝説を継承した東京市中各処の地名には少しく低い土地には千仞の幽谷を見るように地獄谷麴町にあり千日谷四谷鮫ヶ橋にあり我善坊ヶ谷麻布にありなぞという名がつけられ、また少しく小高い処は直ちに峨々たる山岳の如く、愛宕山道灌山待乳山などと呼ばれている。島なき場所も柳島三河島向島などと呼ばれ、森なき処にも鳥森、鷺の森の如き名称が残されてある。始めて東京へ出て来た地方の人は、電車の乗換場を間違えたり市中の道に迷つたりした腹立まぎれ、かかる地名の虚偽を以てこれまた都会の憎むべき悪風として観察するかも知れない。

溝川は元より下水に過ぎない。『紫の一本』にも芝の宇田川を説く条に、「溜池の屋舗の下水落ちて愛宕の下より増上寺の裏門を流れて爰に落る。愛宕の下、屋敷々々の下水も落ち込む故宇田川橋にては少しの川のやうに見ゆれども水上はかくの如し。」とある通り、昔から江戸の市中には下水の落合つて川をなすものが少くなかった。下水の落

合つて川となつた流れは道に沿ひ坂の麓を廻り流れ流れて行く中に段々広くなつて、天然の河流または海に落込むあたりになるとどうやらこうやら伝馬船を通わせる位になる。麻布の古川は芝山内の裏手近くその名も赤羽川と名付けられるようになると、山内の樹木と五重塔の聳ゆる麓を巡つて舟楫の便を与うるのみか、紅葉の頃は四条派の絵にあるような景色を見せる。王子の音無川も三河島の野を潤したその末は山谷堀となつて同じく船を泛べる。

下水と溝川はその上に架つた汚い木橋や、崩れた寺の塀、枯れかかった生垣、または貧しい人家の様と相對して、しばしば憂鬱なる裏町の光景を組織する。即ち小石川柳町の小流の如き、本郷なる本妙寺坂下の溝川の如き、団子坂下から根津に通ずる藍染川の如き、かかる溝川流るる裏町は大雨の降る折といえれば必ず雨潦の氾濫に災害を被る処である。溝川が貧民窟に調和する光景の中、その最も悲惨なる一例を挙げれば麻布の古川橋から三之橋に至る間の川筋であろう。ぶりき板の破片や腐つた屋根板で葺いたあばら家は数町に渡つて、左右から濁水を挟んで互にその傾いた廂を向ひ合せている。春秋時候の変わり目に降りつづく大雨の度ごとに、芝と麻布の高台から滝のように落ちて来る濁水は忽ち兩岸に氾濫して、あばら家の腐つた土台からやがては破れた畳まで

を浸^{ひた}してしまう。雨が霽^はれると水に濡れた家具や夜具蒲団^{やぐふとん}を初め、何とも知れぬ汚^{きたな}らしい檻^{ぼろ}樓の数々は旗^{のぼり}か幟^{のぼり}のように兩岸の屋根や窓の上に曝^{さら}し出される。そして真黒な裸体の男や、腰巻一つの汚い女房や、または子供を背負った児^{こむすめ}娘までが箆^{ざる}や籠^{かご}や桶^{おけ}を持って濁流^{うち}の中に入りつ乱れつ富裕な屋敷の池から流れて来る雑魚^{ざご}を捕えようと急^{あせ}っている有様、通りがかりの橋の上から眺めやると、雨あがりの晴れた空と日光^{もと}の下に、或時はかえつて一種の壯觀を呈している事がある。かかる場合に看取せられる壯觀は、丁度軍隊の整列もしくは舞台における並^{ならび}大^{だい}名^{みょう}を見る時と同様で一つ一つに離して見れば極めて平凡なものである。古川^{ふるかわ}の集合して一団をなす時には、此処^{ここ}に思いがけない美麗と威嚴とが形造られる。古川^{ふるかわ}橋^{ばし}から眺める大雨の後の貧家^{あと}の光景の如きもやはりこの一例であろう。

江戸城の濠^{ほり}はけだし水の美の冠たるもの。しかしこの事は叙述の筆を以てするよりもむしろ絵画^{えが}の技^ぎを以てするに如^しくはない。それ故私は唯^{ただ}代^{だい}官^{かん}町^{ちやう}の蓮池^{はすいけ}御門^{ごもん}、三宅坂^{みやけざかし}下の桜田^{さくらだ}御門^{ごもん}、九段坂^{くだんざかし}下の牛ヶ淵^{うしふち}等古来人の称美する場所の名を挙げるに留^{とど}めて置く。

池には古来より不^{しのばす}忍^{しの}池^{いけ}の勝景ある事これも今更説く必要がない。私は毎年の秋竹^{たけ}の

だい
台に開かれる絵画展覧会を見ての帰り道、いつも市氣満々たる出品の絵画よりも、向ヶ岡
の夕陽敗荷の池に反映する天然の絵画に対して杖を留むるを常とした。そして現代美術
の品評よりも独り離れて自然の面趣に恍惚とする方が遙に平和幸福である事を知るのであ
る。

不忍池は今日市中に残された池の中の最後のものである。江戸の名所に数えられた鏡ヶ
池や姥ヶ池は今更尋る由もない。浅草寺境内の弁天山の池も既に町家となり、また赤
坂の溜池も跡方なく埋めつくされた。それによつて私は将来不忍池もまた同様の運命
に陥りはせぬかと危むのである。老樹鬱蒼として生茂る山王の勝地は、その翠
緑を反映せしむべき麓の溜池あつて完全なる山水の妙趣を示すのである。もし上
野の山より不忍池の水を奪つてしまつたなら、それはあたかも両腕をもぎ取られた人形に
等しいものとなるであろう。都会は繁華となるに従つて益々自然の地勢から生ずる風景の
美を大切に保護せねばならぬ。都会における自然の風景はその都市に対して金力を以て造
る事の出来ぬ威厳と品格とを帶させるものである。巴里にも倫敦にもあんな大きな、そ
してあのように香しい蓮の花の咲く池は見られまい。

都会の水に關して最後に渡船わたしぶねの事を一言いちごんしたい。渡船は東京の都市が漸次ぜんじ整理されて行くにつれて、即ち橋梁の便宜を得るに従つてやがては廃絶すべきものであらう。江戸時代に溯さかのぼつてこれを見れば元禄九年に永代橋えいたいばしが懸かつて、大渡おおわたしと呼ばれた大川口おおかわぐちの渡場わたしばは『江戸鹿子えどかのこ』や『江戸爵えどすずめ』などの古書にその跡を残すばかりとなつた。それと同じように御厩河岸おうまやがしの渡しわたしよろいわたしの渡を始めてとして市中諸所の渡場は、明治の初年架橋工事しゅんせいと竣成しゅんせいと共にいづれも跡を絶ち今はただ浮世絵によつて当時の光景うかがを窺うばかりである。

しかし渡場はいまだ悉く東京市中からその跡を絶つた訳ではない。両国橋を間にしてその川上に富士見ふじみの渡しわたし、その川下に安宅あたけの渡が残っている。月島つきしまの埋立工事が出来上ると共に、築地つきじの海岸からは新に曳船ひきふねの渡しが出来た。向島むこうしまには人の知る竹屋たけやの渡しがあり、橋場はしばには橋場の渡しがある。本所ほんじよの豎川たてかわ、深川ふかがわの小名木川おなぎがわ辺の川筋にたりには荷足船ぶねで人を渡す小さな渡場が幾個所もある。

鉄道の便宜は近世に生れたわれわれの感情から全く羈旅きりよとよぶ純朴なる悲哀の詩情を奪う去ばいさつた如く、橋梁はまた遠からず近世の都市より渡船なる古めかしい緩ゆるやかな情趣やを取除いてしまふであらう。今日世界の都会中渡船なる古雅の趣を保存している処は日本の東京

のみではあるまいか。米国の都市には汽車を渡す大仕掛けの渡船があるけれど、竹屋の渡しの如く、河水かわみずに洗出あらいだされた木目もくめの美しい木造りの船、櫓かしの艫ろ、竹の棹さおを以てする絵の如き渡船はない。私は向島の三囲みめぐりや白髯しらひげに新しく橋梁の出来る事を決して悲しむ者ではない。私は唯両国橋の有無ゆうむにかかわらずその上下かみしもに今なお渡場が残されてある如く隅田川その他の川筋にいつまでも昔のままの渡船のあらん事を希こいねがうのである。

橋を渡る時欄干らんかんの左右からひろびろした水の流れを見る事を喜ぶものは、更に岸を下くだつて水上に浮び鴨かもめと共にゆるやかな波に揺ゆられつつ向むこうの岸に達する渡船の愉快を容易に了解する事が出来るであらう。都会の大道には橋梁の便あつて、自由に車を通ずるにかかわらず、殊ことさら更岸に立つて渡船を待つ心は、丁度表通に立派なアスファルト敷じきの道路あるにかかわらず、好んで横町や路地の間道かんどうを抜けて見る面白さとやや似たものであらう。渡船は自動車や電車に乗って馳はせ廻る東京市民の公生涯こうしょうがいとは多くの関係を持たない。しかし渡船は時間の消費をいとわず重い風呂敷包みなぞ背負せおつてテクテクと市中しちゆうを歩いている者どもには大なる休息たいを与え、またわれらの如き閑散なる遊歩者に向つては近代の生活あじわに味あじわわれない官覺の慰安を覚えさせる。

木で造つた渡船と年老いた船頭とは現在並びに将来の東京に対して最も尊い骨董こっとうの一

つである。古樹と寺院と城壁と同じくあくまで保存せしむべき都市の宝物^{ほうもつ}である。都市は個人の住宅と同じくその時代の生活に適當せしむべく常に改築の要あるは勿論のことである。しかしわれわれは人の家を訪^とうた時、座敷の床^{とこ}の間にその家伝来の書画を見れば何となく奥床^{おくゆか}しく自ら主人^{おのずか}に対して敬意を深くする。都会もその活動的^{たつ}ならざる他の一面において極力伝来の古蹟を保存し以てその品位を保^{たも}たしめねばならぬ。この点よりして渡船^{わたふね}の如きは独^{ひと}りわれら一個の偏狭なる退歩趣味からのみこれを論ずべきものではあるまい。

第七 路地

鉄橋と渡船わたしぶねとの比較からここに思起おもいおこされるのは立派な表通おもてどおりの街路に対してその間々に隠れている路地ろじの興味である。擬造西洋館の商店並び立つ表通は丁度電車の往来する鉄橋の趣に等しい。それに反して日陰の薄暗い路地はあたかも渡船の物哀ものあわれにして情味の深きに似ている。式亭三馬しきていさんばが戯作『浮世床うきよどこ』の挿絵に歌川国直うたがわくになおが路地口ろじぐちのさまを描いた図がある。歌川豊国とよくにはその時代享和二年のあらゆる階級の女の風俗を描いた絵本『時勢粧いまようかがみ』の中うちに路地の有様を写している。路地はそれらの浮世絵に見る如く今も昔と変りなく細民さいみんの棲息する処、日の当った表通からは見る事の出来ない種々さまざまなる生活が潜みひそかくれている。佗住居わびずまいの果敢はかなさもある。隠棲の平和もある。失敗と挫折と窮迫との最終の報酬なる怠惰と無責任との楽境らくきようもある。すいた同士の新世帯しんしよたいもあれば命掛けなる密通の冒険もある。されば路地は細く短しといえども趣味と変化に富むことあたかも長編の小説の如しといわれるであらう。

今日東京の表通は銀座より日本橋にほんばしどおり通は勿論上野の広小路浅草ひろこうじの駒形通こまがたどおりを始め

として到^{いたるところ} 処 西洋まがいの建築物とペンキ塗の看板^や瘦^{おとろ}せ衰えた並樹^{なみき}さては処嫌わず無遠慮に突立っている電信柱とまた目まぐるしい電線の網目のために、いうまでもなく静寂の美を保っていた江戸市街の整頓を失い、しかもなおいまだ音律的な活動の美を有する西洋市街の列に加わる事も出来ない。さればこの中途半端の市街に対しては、風雨^{ふうう}雪^{せつ}月^{げつ}夕^せ陽^{きよう}等の助けを借^かるにあらずんば到底芸術的感興を催す事ができない。表通を歩いて絶えず感ずるこの不快と嫌悪の情とは一層私^{ひとしお}をしてその陰にかくれた路地の光景に興味を持たせる最大の原因になるのである。

路地はどうかすると横町同様人力車^{くるま}の通れるほど広いものもあれば、土蔵^{どぞう}または人家の狭間^{ひあわい}になつて人一人やつと通れるかどうかと危^{あやぶ}まれるものもある。勿論その住民の階級職業によつて路地は種々異つた体裁^{ていさい}をなしている。日本橋^{にほんばし}際^{ぎわ}の木原店^{きはらだな}は軒^{のきなみ}並飲食^{あずまばし}店の行燈^{あんどう}が出てゐる処から今だに食傷^{しょくしょう}新道^{しんみち}の名がついている。吾妻橋^{あずまばし}の手前^と東橋^{とうきよう}亭^{てい}とよぶ寄席^{よせ}の角^{かど}から花川戸^{はなかわど}の路地に這入^{はい}れば、ここは芸人や芝居^{しばい}者^{もの}また遊芸の師匠^{ししやう}なぞの多い処から何となく猿若町^{さるわかまち}の新道^{しんみち}の昔もかくやと推量せられる。いつも夜店^{にぎわ}の賑^はう八丁堀^{はちちょう}北島町^{きたじまちょう}の路地には片側に講釈^{じやうせき}の定席^{じやうせき}、片側には娘義太夫^{むすめぎだゆう}の定席が向合つてゐるので、堂摺連^{どうするれん}の手拍子^{てびやうし}は毎夜張扇^{はりおうぎ}の響^うに打交^{うちまじわ}る。両^{りやう}

国こくの広小路ひろこうじに沿うて石を敷いた小路には小間物屋ふくろものや袋物屋せんべいや煎餅屋よこやなど種々しゆじゆなる小
 売店みせの賑う有様、正しく屋根のない勸工場かんこうばの廊下と見られる。横山町よこやまち辺へんのとある
 路地の中なかにはやはり立派に石を敷詰めた両側ともに長門筒ながとつつ袋物ふくろものまた筆など製してい
 る問屋とんやばかりが続いているので、路地一帯が倉庫のように思われる処があつた。芸者家げいしやや
 の許可された町の路地はいうまでもなく艶なまめかしい限りであるが、私はこの種類うちの中では新
 橋柳橋しやなぎばしの路地よりも新富座裏しんとみざうらの一角をばそのあたりの堀割の夜景とまた芝居小屋の
 背面を見る様子とから最も趣のあるように思っている。路地の最も長くまた最も錯雑して、
 あたかも迷宮の観あるは葭町よしちようの芸者家町であろう。路地の内に蔵造くらづくりの質屋もあれ
 ば有徳うしやくな人の隠宅いんたくらしい板塀も見える。わが拙作せつさく小説『すみだ川』の篇中にはかかる
 路地の或場所をばその頃見たままに写生して置いた。

路地の光景が常に私をしてかくの如く興味を催さしむるは西洋銅版画に見るが如きある
 いはわが浮世絵に味うが如き平民的画趣ともいふべき一種の芸術的感興もとづに基くものである。
 路地を通り抜ける時試こころみに立止つて向うを見れば、此方こなたは差迫る両側の建物に日を遮さへぎられて
 湿しめつぽく薄暗くなっている間から、彼方遥かなたに表通の一部分だけが路地の幅だけにくつきり
 限られて、いかにも明るそうに賑にぎやかそうに見えるであらう。殊に表通りの向側に日の光が

照渡つてゐる時などは風になびく柳の枝や広告の旗の間に、往来ゆききの人の形が影の如く現れては消えて行く有様、丁度燈火に照された演劇の舞台を見るような思いがする。夜になつて此方は真暗な路地裏から表通の燈火を見るが如きはいわずともまた別べつ様の興趣ようがある。川添いの町の路地は折々しのびがえ忍返しのびがえしをつけたその出口から遙に河岸通かしじおりのみならず、併せて橋の欄干や過行く荷船の帆の一部分を望み得させる事がある。かくの如き光景はけだし逸品中の逸品である。

路地はいかに精密なる東京市の地図にも決して明あきらには描き出されてゐない。どこから這は入いつて何処へ抜けられるか、あるいは何処へも抜けられず行止ゆきどまりになつてゐるものか否か、それはけだしその路地に住んで始めて判然するので、一度や二度通り抜けた位では容易に判明すべきものではない。路地には往々江戸時代から伝承きたし來つた古い名称がある。即ち中橋なかばしの狩野新道かのうしんみちというが如き歴史的由緒ゆいしよあるものも尠すくなくない。しかしそれとてもその土地に住古すみふるしたものの間にのみ通用されべき名前であつて、東京市の市政が認めて以て公の町名となしたものは恐らくは一つもあるまい。路地は即ちあくまで平民の間にのみ存在し了解されてゐるのである。犬や猫が垣の破れや塀の隙間を見出して自然とその種属ばかりに限られた通路を作ると同じように、表通りに門戸もんこを張ることの出来ぬ平民は大

道と大道との間に自ら^{おのずか}彼らの棲息に適當した路地を作つたのだ。路地は公然市政によつて經營されたものではない。都市の面^{めん}目^{ぼく}体裁品格とは全然關係なき別天地である。されば貴人の馬車富豪の自動車の地^じ響^{びき}に午睡^{ごすい}の夢を驚かさるる恐れなく、夏の夕^{ゆう}は格子戸^{こうしど}の外に裸体で涼む自由があり、冬の夜^よは置炬燵^{おきこたつ}に隣家の三味線を聞く面白さがある。新聞買わずとも世間の噂^{うわさ}は金棒^{かなぼう}引^ひの女房によつて仔細に伝えられ、喘息^{ぜんそく}持^{もち}の隱居^{いんきょ}が咳嗽^{せき}は頼まざるに夜通し泥棒の用心となる。かくの如く路地は一種いいがたき生活の悲哀^うの中に自からまた深刻なる滑稽の情趣を伴わせた小説的世界である。しかして凡^{すべ}てこの世界のあくまで下世話^{げせわ}なる感情と生活とはまたこの世界を構成する格子戸^{こうしど}、溝板^{どぶいた}、物干台^{ものほしだい}、木戸^{きど}、忍返^{ぐものびがえし}なぞいう道具^{どうぐ}立と一致している。この点よりして路地はまた渾然^{こんぜん}たる芸術的調和の世界といわねばならぬ。

第八 閑地

市中しちゆうの散歩に際して丁度前章に述べた路地と同じような興味を感じしむるものが最も一つある。それは閑地あきちである。市中繁華なる街路の間に夕顔ひるがお 昼顔おほぼこ 露草車前草おおほこなぞいう雑草の花を見る閑地である。

閑地は元よりその時と場所とを限らず偶然に出来るもの故われわれは市内の如何なる処に如何なる閑地があるかは地面師じめんしならぬ限り予めあらかじこれを知る事が出来ない。唯ただその場に通いたりかかつて始めてこれを見るのみである。しかし閑地は強しいて捜し歩かずとも市中到いたるところにある。今まで久しく草の生えていた閑地が地ならしされてやがて普請ふしんが始まるかと思えば、いつの間にかその隣の家うちが取払われて、或場合あるには火事で焼けたりして爰ここに別の閑地ができる。そして一雨降ればひとあめすぐに雑草が芽を吹きやがて花を咲かせ、忽ちにして蝶々ちようちよう 蜻蛉とんぼやきりぎりすの飛んだり躍はねたりする野原になつてしまつと、外そと 圀がこいはあつてもないと同然、通り抜ける人たちの下駄の齒こみちに小径は縦横に踏開かれ、昼は子供の遊あ場そびば、夜は男女が密会しろうとずもうの場所となる。夏の夜に処の若い者が素人相撲しろうとずもうを催すのも閑地が

あるためである。

市中繁華な町の倉と倉との間、または荷船の込合こみあう堀割近くにある閑地には、今も昔と
 変りなく折々紺屋こうやの干場ほしばまたは元結もとゆいの糸繰場いとくりばなどになっている処がある。それらの光
 景は私の眼には直ただちに北斎ほくさいの画題を思おも起おこさせる。いつぞや芝白しばしろ金の瑞聖寺ずいしょうじという
 名高い黄檗おうばく宗しゅうの禅寺を見に行つた時その門前の閑地に一人の男が頻しきりと元結の車を繰つ
 ていた。この景色は荒れた寺の門とその辺へんの貧しい人家などに対照して、私は俳人其角きかくが
 茅場町薬師堂かやばちようやくしどうのひとりなる草庵の裏手、蓼たでの花穂はなほに出でたる閑地に、文七ぶんしちというも
 のが元結こぐ車の響をば昼も蝸ひぐらしに聞きまじえてまた殊更の心地し、

文七にふまるな庭のかたつむり

元結のぬる間はかなし虫の声

大絃たいげんはさらすもとひに落おつる雁かり

なぞと吟ぎんじたる風流の故事を思おも浮いうべたのであつた。この事は晋子しんしが俳文集『類柑子るいこうじ』
 の中北うちの窓と題された一章に書かれてある。『類柑子』は私の愛読する書物の中の一冊で
 ある。

私がまだ中学校へ通っている頃までは東京中には広い閑地が諸処方々にあつた。神田かんだ三崎町さきちようの調練場ちようれんば跡は人殺ひところしや首縊くびくくりの噂で夕暮からは誰一人通るものもない恐しい処であつた。小石川富坂こいしかわとみさかの片側は砲兵工廠ほうへいこうしようの火避地ひよけちで、樹木の茂つた間の凹地くぼちには溝みぞが小川のように美しく流れていた。下谷したやの佐竹ヶ原さたけはら、芝しばの薩摩原さつまぼらの如き旧諸侯の屋敷跡はすっかり町になつてしまつた後でも今だに原の名が残されている。

銀座通に鉄道馬車がつつて、数寄屋橋すきやばしから幸橋さいわいばしを経て虎とらの門もんに至る間の外濠そとぼりには、まだ昔の石垣がそのままに保存されていた時分、今日の日比谷公園ひびやは見通しきれぬほど広々した閑地で、冬枯の雑草ゆうひに夕陽のさす景色は目のあたり武蔵野むさしのを見るようであつた。その時分に比すれば大名小路だいみようこうじの跡なる丸の内の三ツ菱ヶ原みつづしも今は大方赤煉瓦あかれんがの会社になつてしまつたが、それでもまだ処々に閑地を残している。私は鍛冶橋かじばしを渡つて丸の内へ這入はいる時、いつでも東京府庁の前側にひろがつている閑地を眺めやるのである。何故なぜというにこの閑地には繁茂した雑草の間に池のような広い水みづたまりが幾個所もあつて夕陽の色や青空の雲の影が美しく漂たなようからである。私は何となくこういう風に打捨てられた荒地をばかつて南支那なんしな辺にある植民地の市街の裏手、または米国西海岸の新開地の街なぞで幾度いくんども見た事があるような気がする。

桜田見附さくらだみつけの外にも久しく兵營の跡が閑地のままに残されている。参謀本部下の堀端ほりばたを通りながら眺めると、閑地のやや小高こたかくなっている処に、雑草や野蔦のつたに蔽おほわれたまま崩れた石垣の残っているのが見える。その石の古びた色とまた石垣の積み方とはおのずと大名屋敷の立っていた昔を思起させるが、それと共に私はまた霞ヶ関かすみせきの坂に面した一方に今だに一棟ひとむねか二棟ほど荒れたまま立っている平家ひらやの煉瓦造を望むと、御老中ごろうじゅう御奉行ごぶぎょうなどという代りに新しく参議だの開拓使などという官名が行われた明治初年の時代に対して、今となつてはかえつて淡く寂しい一種の興味を呼出されるのである。

明治十年頃こはやしきよちかお小林清親翁うちが新しい東京の風景を写生した水彩画をば、そのまま木板もくはん摺ずりにした東京名所の図の中に外桜田遠景そとと題して、遠く樹木の間にこの兵營の正面を望んだ処が描かれている。当時都下の平民が新に皇城こうじょうの門外に建てられたこの西洋造を仰ぎ見て、いかなる新奇の念とまた崇拜の情に打れたか。それらの感情は新しい画工のいわば稚氣ちきを帯びた新画風と古めかしい木板摺の技術と相俟あいまつて遺憾なく紙面に躍如としてゐる。一時代の感情を表現し得たる点において小林翁の風景版画は甚だ価値ある美術といわねばならぬ。既に去歳きよさい木下杢太郎きのしたもくたろう氏は『芸術』第二号において小林翁の風景版画に関する新研究の一端いったんを漏らされたが、氏は進んで翁の経歴をたずねその芸術について更

に詳細なる研究を試みられるとの事である。

小林翁の東京風景画は ふるかわもくあみ 古河黙阿弥の世話狂言「筆屋幸兵衛」ふでやこうべえ「明石島蔵」あかしのしまぞうなどと

並んで、明治初年の東京を窺い知るべき無上の資料である。維新の当時より下つて憲法発

布に至らんとする明治二十年頃までの時代は、今日の吾人よりしてこれを回顧すれば東京

の市街とその風景の変化、風俗人情流行の推移等あらゆる方面にわたつて甚だ興味あるも

のである。されば滑稽なるわが日和下駄の散歩は江戸の遺跡と合せてしばしばこの明治初

年の東京を尋ねる事に勉めてゐる。しかし小林翁の出版物に描かれた新しい当時の東京も、

僅か二、三十年とは経たぬ中、更に更に新しい第二の東京なるものの発達するに従つて、

漸次跡方もなく消滅して行きつつある。明治六年筋違見附を取壊してその石材を以て

造つた彼の眼鏡橋はそれと同じような形の浅草橋と共に、今日は皆鉄橋に架け替えら

れてしまった。大川端なる元柳橋は水際に立つ柳と諸共全く跡方なく取り払われ、

百本杭はつまらない石垣に改められた。今日東京市中において小林翁の東京名所絵と

参照して僅にその当時の光景を保つものを求めたならば、虎の門に残っている旧工学寮の

煉瓦造、九段坂上の燈明台、日本銀行前なる常盤橋その他数箇所に過ぎまい。官衛

の建築物の如きも明治当初のままなるものは、桜田外の参謀本部、神田橋内の印刷局、

江戸橋際の 駅通局 えきどほ いきよく なぞ指折り数えるほどであろう。

閑地のことからまたしても話が妙な方面へそれてしまった。

しかし閑地と古い都会の追想とはさして無関係のものではない。芝赤羽根の海軍造兵廠の跡は現在何万坪という広い閑地になっている。これは誰も知っている通り有馬侯の屋舗跡で、現在蠣殻町にある水天宮は元この邸内にあったのである。一立斎広重の『東都名勝』の中赤羽根の図を見ると柳の生茂った淋しい赤羽根川の堤に沿うて大名屋敷の長屋が遠く立続いている。その屋根の上から水天宮へ寄進の幟が幾筋となく閃いている様が描かれている。この図中に見る海鼠壁の長屋と朱塗の御守殿門とは去年の春頃までは半ば崩れかかったままながらなお当時の面影を留めていたが、本年になって内部に立つ造兵廠の煉瓦造が取払われると共に、今は跡方もなくなってしまった。

その時分——今年の五月頃の事である。友人久米君から突然有馬の屋敷跡には名高い猫騷動の古塚が今だに残っているという事だから尋ねて見たらばと注意されて、私は慶応義塾の帰りがけ始めて久米君とこの閑地へ日和下駄を踏入れた。猫塚の噂は造兵廠が取払いになつて閑地の中にはそろそろ通抜ける人たちの下駄の齒が縦横に小徑をつけ始

める頃から誰いうとなくいい伝えられ、既にその事は二、三の新聞紙にも記載されていたという事であつた。

私たち二人は三田通に沿う外^{そとがこい} 田^{ぢふ}の溝^{ふち}の縁^{たちどま}に立止つて何処か這入りいい処を見付けようと思つたが、板塀には少しも破^{やぶ}目^{れめ}がなく溝はまた広くてなかなか飛越せそうにも思われない。見す見す閑地の外を迂廻^{うかい}して赤羽根の川端まで出て見るのも業^{ごう}腹^{はら}だし、そうかといつて通過ぎた酒屋の角まで立戻つて坂を登り閑地の裏手へ廻つて見るのも退儀^{たいぎ}である。そう思うほどこの閑地は広々としてるのである。私たちはやむをえず閑地の一角に恩賜財団済生会^{おんし さいせいかい}とやらしい札を下げた門口^{もんぐち}を見付けて、用事あり氣に其処^{そこ}から構^{かまえう}内^ちへ這入つて見た。構内は往来から見たと同じように寂^{しん}として、更に番人のいる様子も見えない。私たちは安心してずんずんと赤煉瓦の本家^{おもや}について迂廻しながらその裏手へ出てみると、僅^{うえした}か上下二筋^{ふたすじ}の鉄条綱^{てつじょうこう}が引張つてあるばかりで、広々した閑地は正面に鬱々として老樹の生茂^{あた}つた辺^{あたり}から一帯に丘陵^{ふもと}をなし、その麓^{ふもと}には大きな池があつて、男や子供が大勢釣竿を持つてわいわい騒いでいる意外な景氣に興味百倍して、久米君は手早く夏羽織^{なつばおり}の裾^{すそ}と袂^{たもと}をからげるや否や身軽く鉄条綱の間をくぐつて向^むへ出てしまった。私は生憎^{あいにく}その日は学校の図書館から借出した重い書物の包を抱えていた上に、片手には例

の蝙蝠傘こうもりがさを持つていた。そればかりでない。私の穿はいていた藍縞あいじま仙台平せんたいひらの夏袴なつばかまは死んだ父親の形見でいかほど胸高むなだかに締しめてもとかくずるずると尻下しりさかりに引摺ひきずつて来る。久米君は見兼ねて鉄条綱の向から重い書物の包と蝙蝠傘とを受取つてくれたので、私は日和下駄はなおの鼻緒はなおを踏ふみ《ふみし》め、紬つむぎの一重羽織ひとえばおりの裾を高く巻上げ、きつと夏袴の股も立もたちを取ると、図抜せいけて丈せの高い身の有難さ、何の苦もなく鉄条綱をば上から一跨ひとまたぎに跨またいでしまった。

二人は早速閑地あきちの草原を横切つて、大勢釣おおぜいする人の集つてゐる古池なごせの渚なみへと急いだ。池はその後に聳そびゆる崖の高さと、また水面に枝を垂した老樹や岩石の配置から考えて、その昔ここに久留米くるめ二十余万石の城主やまたの館が築かれていた時分には、現在水みづの漂ただよつてゐる面積よりも確にその二、三倍広かつたらしく、また崖の中腹からは見事な滝が落ちていたらしく思われる。私は今まで書物や絵で見ていた江戸時代の数ある名園の有様をば臆おぼろ気ながら心うちの中に描え出した。それと共に、われわれの生れ出た明治時代の文明なるものは、実にこれらの美術をば惜気おしげもなく破壊して兵營や兵器の製造場せいぞうばにしてしまったような英断壮挙の結果によつて成つたものである事を、今更いまさらの如くつくづくと思知るのであつた。池のまわりは浅草公園の釣堀も及ばぬ賑にぎやかである。鰯いさなと鰯いさなと時には大きな鰻うなぎが釣れると

いう事だ。私たちは水際みずぎわを廻めぐつて崖の方へ通ずる小径こみちを攀よじ登のぼつて行くと、大木の根方ねがたに爺じいが一人腰をかけて釣道具に駄菓子やパンなどを売っている。機を見るに敏なるこの親お爺やじの商法にさすがのわれわれも聊いささか敬服して、その前に立止たつたついで、猫塚の所在ありかを尋ねると、爺さんは既に案内者然たる調子で、崖の彼方かなたなる森蔭の小径を教え、なお猫塚といつても今は僅いすくにかけた石の台を残すばかりだという事まで委くわしく話してくれた。

名所古蹟は何処いずくに限らず行つて見れば大抵こんなものかと思うようなつまらぬものである。唯ただその処まで尋ね到る間の道筋や周囲の光景及びそれに附随する感情等によつて他日話の種となすに足るべき興味が繋つながれるのである。有馬の猫塚は釣道具を売っている爺さんが話したよりも、来て見れば更につまらない石のかけらに過ぎなかった。果してそれが猫塚の台石だいしであつたか否かも甚だ不明な位であつた。私たちは旧造兵廠の建物の一部をば眼下みおろに低く見下す崖地がけちの一角に、昼なお暗く天を蔽うた老樹の根方ねがたと、また深く雑草に埋うずめられた崖の中腹に一ツ二ツ落ち転ころがっている石を見つけたばかりである。しかしここに来るまでの崖の小径と周囲の光景とは遺憾なく私ら二人を喜ばしめた。私は実際今日の東京市にかくも幽邃ゆうすいなる森林が残されていようとは夢にも思い及ばなかった。柳椎しがいし桎し椿しなぞの大木に交まじつて扇骨木かなめや八ツ手でなぞの庭木さえ多年手入をせぬ処から今は全く野生の

林同様七重八重にその枝と幹とを入れちがえている。時節は丁度初夏の五月の事とて、これらの樹木はいずれもその枝の撓むほど、重々しく青葉に蔽われている上に、気味の悪い名の知れぬ寄生木が大樹の瘤や幹の股から髪の毛のような長い葉を垂らしていた。遠い電車の響やまた近く崖下で釣する人の立騒ぐ声にも恐れず勢よく囀る小鳥の声が鋭く梢から梢に反響する。私たち二人は雑草の露に袴の裾を潤しながら、この森蔭の小暗い片隅から青葉の枝と幹との間を透して、彼方遙かに広々した閑地の周囲の処々に残っている練堀の崩れに、夏の日光の殊更明る照渡っているのを打眺め、何という訳もなく唯惆悵として去るに忍びざるが如くいつまでもうんでいた。私たちは既に破壊されてしまった有馬の旧苑に対して痛嘆するのではない。一度破壊されたその跡がここに年を経て折角荒蕪の詩趣に蔽われた閑地になっている処をば、更に何らかの新しい計画が近い中にこの森とこの雑草とを取払ってしまうであろう。私たちはその事を予想して前以て深く嘆息したのである。

私は雑草が好きだ。葦蒲公英のような春草、桔梗女郎花のような秋草にも劣らず私は雑草を好む。閑地に繁る雑草、屋根に生ずる雑草、道路のほとり溝の縁に生ずる雑草

を愛する。閑地は即ち雑草の花園である。「蚊帳釣草」の穂の練絹の如くに細く美しき、「猫じやらし」の穂の毛よりも柔き、さては「赤の飯」の花の暖そうに薄赤き、「車前草」の花の爽に蒼白き、「繫」の花の砂よりも小くして真白なる、一ツ一ツに見来れば雑草にもなかなか捨てがたき可憐なる風情があるではないか。しかしそれらの雑草は和歌にも咏われず、宗達光琳の絵にも描かれなかった。独り江戸平民の文学なる俳諧と狂歌あつて始めて雑草が文学の上に取扱われるようになった。私は喜多川歌麿の描いた『絵本虫撰』を愛して止まざる理由は、この浮世絵師が南宗の画家も四条派の画家も決して描いた事のない極めて卑俗な草花と昆虫とを写生しているがためである。この一例を以てしても、俳諧と狂歌と浮世絵とは古来わが貴族趣味の芸術が全く閑却していた一方面を拾取つて、自由にこれを芸術化せしめた大なる功績を担うものである。私は近頃数寄屋橋外に、虎の門金毘羅の社前に、神田聖堂の裏手に、その他諸処に新設される、公園の樹木を見るよりも、通りがかりの閑地に咲く雑草の花に対して遙にいい知れぬ興味と情趣を覚えるのである。

戸川秋骨君が『そのままの記』に霜の戸山ヶ原という一章がある。戸山ヶ原は旧尾

州侯御下屋舗しゅうこうおしもやしきのあつた処、その名高い庭園は荒されて陸軍戸山学校と変じ、附近は広漠たる射的場しやてきばとなつてゐる。この辺豊多摩郡あたりとよたまごおりに属し近き頃まで杜鵑花つつじの名所であつたが、年々人家稠密ちゆうみつしていわゆる郊外の新開町しんかいまちとなつたにかかわらず、射的場のみは今なお依然として原のままである。秋骨君いわ曰く

戸山の原は東京の近郊に珍らしい広開こうかいした地である。目白めじろの奥から巣鴨滝すがもたきの川がわへかけての平野は、さらに広い武蔵野むさしのの趣を残したものである。しかしその平野は凡てすべ耒耜らうしが加えられている。立派に耕作された畠地はたちである。従つて田園の趣はあるが野趣に至つては乏しい。しかるに戸山の原は、原とは言へども多少の高低があり、立樹たちぎが沢山にある。大きくはないが喬木きようぼくが立ち籠めて叢林そうりんを為した処もある。そしてその地には少しも人工が加わつてゐない。全く自然のままである。もし当初の武蔵野の趣を知りたいと願うものは此処ここにそれを求むべきであろう。高低のある広い地は一面に雑草を以て蔽おほわれていて、春は摘草つみくさに児女じじよの自由に遊ぶに適し、秋は雅人がほんいままの擅たずさに散歩するに任すまか。四季の何時いつと言わず、絵画の学生が此処ここ其処そこにカンヴァスを携え、この自然を写しているのが絶えぬ。まことに自然の一大公園である。最も健全な遊覧地である。その自然と野趣とは全く郊外の他の場所たに求むべからざるものである。

る。凡そ今日の勢、いやしくも余地あれば其処に建築を起す、然らずともこれに耒耜を加うるに躊躇しない。然るに如何にして大久保の辺に、かかる殆んど自然そのまゝの原野が残っているのであるか。不思議な事にはこれが実に俗中の俗なる陸軍の賜である。戸山の原は陸軍の用地である。その一部分は戸山学校の射的場で、一部分は練兵場として用いられている。しかしその大部分は殆んど不用の地であるかの如く、市民もしくは村民の蹂躪するに任してある。騎馬の兵士が大久保柏木の小路を隊をなして駆せ廻るのは、甚だ五月蠅いものである。否五月蠅いではない癩にさわる。天下の公道をわがもの顔に横領して、意気頗る昂る如き風あるは、われら平民の甚だ不快とする処である。しかしこの不快を与うるその大機関は、また古の武蔵野をこの戸山の原に、余らのために保存してくれるものである。思えば世の中は不思議に相贖うものである。一利一害、今さらながら応報の説が殊に深く感ぜられる。

秋骨君が言う処大にわが意を得たものである。こは直に移して代々木青山の練兵場または高田の馬場等に応用する事が出来る。晩秋の夕陽を浴びつつ高田の馬場なる黄葉の林に彷徨い、あるいは晴れたる冬の朝青山の原頭に雪の富士を望むが如きは、これ皆俗中の俗たる陸軍の賜物ではないか。

私は慶応義塾に通う電車の道すがら、しなのまちごんだわら 信濃町権田原へを経、青山の大通を横切つて三さんれ聯隊んたいうら裏しると記した赤い棒の立っている辺りあたまで、その沿道の大きな建物はことごと尽く陸軍に属するもの、また電車の乗客街上の通行人は兵卒ならざれば士官ばかりという有様に、私はいつも世をあげ挙て悉く陸軍たるが如き感を深くする。それと共に権田原の林に初夏の新緑を望み、三聯隊裏と青山墓地との間の土手や草原に春は若草、秋は芒すすきの穂を眺めて、秋骨君のいわゆる応報の説に同感するのである。

四谷よつやさめ鮫ケ橋はしと赤坂あかさかりきゆう離宮との間に甲武鉄道こうぶてつどうの線路を堺さかいにして荒草こうそう萋々せいせいたる火避ひよ地けちがある。初夏の夕暮私は四谷通の髪結床かみゆいどこへ行つた帰途かえりみちまたは買物にでも出た時、法蔵寺横町ほうぞうじよこまちだとかあるいは西念寺横町さいねんじよこまちだとか呼ばれた寺の多い横町へ曲つて、車の通れぬ急な坂をば鮫ケ橋谷町たにまちへ下り貧家の間を貫く一本道をば足の行くがままに自然おのずとかの火避地に出で、ここに若葉と雑草と夕榮ゆうばえとを眺めるのである。

この散歩は道程みちのりの短い割に頗る変化に富むが上に、また偏狭なる我が画興に適する処すくなが尠くない。第一は鮫ケ橋なる貧民窟の地勢である。四谷と赤坂両区の高地に挟まれたこの谷底の貧民窟は、堀割と肥料船こえぶねと製造場せいぞうばとを背景にする水場みずばの貧家に対照して、坂と崖と樹木とを背景にする山の手の貧家の景色を代表するものであろう。四谷の方の坂から

見ると、貧家のブリキ屋根は木立こたちの間に寺院と墓地の裏手を見せた向側の崖下にごたごたと重り合つてその間から折々汚らしい洗濯物をば風ひらめかに閃ひらめいている。初夏の空美しく晴れ崖の雑草に青々とした芽が萌もえ出いで四辺あたりの木立に若葉の緑が滴したたる頃には、眼の下に見下すこの貧民窟のブリキ屋根は一層汚ひとしおらしくこうした人間の生活には草や木が天然から受ける恵みにさえ与あずけないのかとそぞろ悲惨の色を増すのである。また冬の雨降り濺そそぐ夕暮などには破れた障子しょうじにうつる燈火の影、鴉鳴く墓場の枯木と共に遺憾なく色あせた冬の景色を造り出す。

この暗鬱な一隅から僅に鉄道線路の土手一筋を越えると、その向むこうにはひろびろした火避地を前に控えて、赤坂御所の土塀どべいが乾ぬいの御門というのを中央なかにして長い坂道をば遠く青山の方へ攀よじ登ぼっている。日頃人通ひととおりの少ない処とて古風な練塀ねりべいとそれを蔽おほう樹木とは殊けだかに気高く望まれる。私は火避地のやや御所の方に近く猫柳が四、五本乱れ生じているあたりに、或年の夏の夕暮雨のような水音を聞付け、毒虫をも恐れず草を踏み分けながらその方へ歩寄あゆみよった時、柳の蔭には山の手の高台には思いも掛けない蘆あしの茂りが夕風にそよいでいて、井戸のように深くなった凹味くぼみの底へと、大方御所から落ちて来るらしい水の流が大きな堰せきにせかれて滝をなしているのを見た。夜になつたらきつと螢ほたるが飛ぶにちがい

ない。私はこの夕ゆうべばかり夏の黄たそがれ昏ぐれの長くつづく上にも夕月の光ある事を憾うらみながら、もと来た鯨ケ橋の方へと踵きびすを返した。

鯨ケ橋の貧民窟あかつきは一時代々木の原に万国博覧会が開かれるとかいう話のあった頃、もしそうになった暁あかつき四谷代々木間の電車の窓から西洋人がこの汚い貧民窟みわろを見下しでもすると国家の耻辱ちじよくになるから東京市はこれを取払ってしまうとやという噂うわさがあった。しかし万国博覧会も例の日本人の空景からげいき気で金がない処からおじやんになり、従つて鯨ケ橋も今日なお取払われず、西念寺さいねんじの急な坂下に依然として剥はちよろのブリキ屋根を並べている。貧民窟は元より都会の美観を増すものではない。しかし万国博覧会を見物に来る西洋人に見られたからとて何もそれほどに氣まりを悪るるには及ぶまい。当路とうろの役人ほど馬鹿な事を考える人間はない。東京なる都市の体裁、日本なる国家の体面に関するものを挙げたなら貧民窟の取払いよりも先ず市中諸処に立つ銅像どりのけの取除とりけを急ぐが至当であろう。

現在私の知っている東京の閑地あきちは大抵以上のようなものである。わが住む家の門外にもこの両三年市ヶ谷監獄署あとし後の閑地がひろがつていたが、今年の春頃から死刑台あとしの跡あとに観音あとしができあたりは日々町にちにちになつて行く、遠からず芸者家げいしややが許可されるとかいう噂うわささえあ

る。

芝浦しばうらの埋立地うめたてちも目下家屋の建たない間は同じく閑地として見るべきものであろう。

現在東京市内の閑地の中でこれほど広々とした眺望をなす処は他たにあるまい。夏の夕ゆうべ、海の上に月の昇る頃はひろびろした閑地の雑草は一望煙の如くかすみ渡つて、彼方かなた此方こなたに通ずる堀割から荷船にふねの帆柱が見える景色なぞまんざら捨てたものではない。

東京市の土木工事は手をかえ品をかえ、孜孜ししとして東京市の風景を毀損きそんする事に勉めて
いるが、幸にも雑草なるものあつて焼野の如く木一本もない閑地にも緑柔き毛氈もうせんを延のべ、
月の光あつてその上に露の珠たまの刺繡ぬいとりをする。われら薄倖はくこうの詩人は田園においてよりも
黄塵こうじんの都市において更に深く「自然」の恵みに感謝せねばならぬ。

第九 崖

数ある江戸名所案内記中その最も古い方に属する『紫の一 本』や『江戸惣鹿子大全』などをみると、坂、山、窪、堀、池、橋なぞいう分類の下に江戸の地理古蹟名所の説明をしている。しかしその分類は例えば谷という処に日比谷、谷中、渋谷、雑司ヶ谷などを編入したように、地理よりも実は地名の文字から来る遊戯的興味に基いた処が尠くない。かくの如きはけだし江戸軽文学のいかなるものにも必ず発見せられるその特徴である。

私は既に期せずして東京の水と路地と、つづいて閑地に対する興味をばやや分類的に記述したので、ここにもう一つ崖なる文章を付加えて見よう。

崖は閑地や路地と同じようにわが日和下駄の散歩に尠からぬ興味を添えしめるものである。何故というに崖には野笹や芒に交つて薊、藪、枯しを始めありとあらゆる雑草の繁茂した間から場所によると清水が湧いたり、下水が谷川のように潺々と音して流れたりしている処がある。また落掛るように斜に生えた樹木の幹と枝と殊に根の形などに絵画的興味を覚えさせることが多いからである。もし樹木も雑草も何も生えていないとすれば、

東京市中の崖は切立つた赤土の夕日を浴びる時なぞ宛然堡壘を望むが如き悲壯の観を示す。

昔から市内の崖には別にこれという名前のついた処は一つもなかったようである。『紫の一本』その他の書にも、窪、谷なぞいう分類はあるが崖という一章は設けられていない。しかし高低の甚しい東京の地勢から考えて、崖は昔も今も変りなく市中の諸処に聳えていたに相違ない。

上野から道灌山飛鳥山へかけての高地の側面は崖の中で最も偉大なものであろう。神田川を限るお茶の水の絶壁は元より小赤壁の名がある位で、崖の最も絵画的なる実例とすべきものである。

小石川春日町から柳町指ヶ谷町へかけての低地から、本郷の高台を見る処々には、電車の開通しない以前、即ち東京市の地勢と風景とがまだ今日ほどに破壊されない頃には、樹や草の生茂った崖が現れていた。根津の低地から弥生ヶ岡と千駄木の高地を仰げばここもまた絶壁である。絶壁の頂に添うて、根津権現の方から団子坂の上へと通ずる一条の路がある。私は東京中の往来の中で、この道ほど興味ある処はないと思つている。片側は樹と竹藪に蔽われて昼なお暗く、片側はわが歩む道さえ崩れ落ちはせ

ぬかと危あやぶまれるばかり、足下あしもとを覗のぞくと崖の中腹に生えた樹木の梢こずえを透すかして谷底のような低い処にある人家の屋根が小さく見える。されば向むは一面いっぺんに遮さへぎるものなき大空かぎりもなく広々として、自由に浮雲の定めなき行衛ゆくえをも見極められる。左手には上野谷中に連る森黒く、右手には神田下谷浅草へかけての市街が一目に見晴され其処そこより起る雑然ちまたたる巷の物音が距離のために柔げられて、かのヴェルレエヌが詩に、

かの平和なる物のひびきは

街まちより来る……

といったような心持を起させる。

当代の碩学せきがく森鷗外もりおうがい先生の居邸きよていはこの道のほとり、団子坂だんござかの頂いただきに出ようとすゝる処にある。二階の欄干らんかんにたたずたたず生はこの楼かんちようろうを觀潮楼と名付けられたのだと私は聞伝えている。団子坂をば汐見坂という由後に人より聞きたり。度々私はこの觀潮楼に親しく先生に見ゆるの光榮に接しているが多くは夜になつてからの事なので、惜しいかな一度ひとたびもまだ潮うしおを觀る機会がないのである。その代り、私は忘れられぬほど音色ねいろの深い上野の鐘を聴いた事があつた。日中はまだ残暑の去りやらぬ初秋しよしゅうの夕暮であつた。先生は大方御食事中でもあつたのか、私は取

次の人に案内されたまま暫くの間唯一人この観潮楼の上に取残された。楼はたしか八畳に六畳の二間かと記憶している。一間の床には何かいわれのあるらしい雷という一字を石摺にした大幅がかけてあつて、その下には古い支那の陶器と想像せられる大きな六角の花瓶が、花一輪さしてないために、かえつてこの上もなく嚴格にまた冷静に見えた。座敷中にはこの床の間の軸と花瓶の外は全く何一つ置いてないのである。額もなければ置物もない。おそろおそろ四枚立の襖の明放してある次の間を窺うと、中央に机が一脚置いてあつたが、それさえいわば台のようなもので、一枚の板と四本の脚があるばかり、拙出もなければ彫刻のかざりも何もない机で、その上には硯もインキ壺も紙も筆も置いてはない。しかしその後^{うしろ}に立てた六枚屏風の裾からは、紐で束ねた西洋の新聞か雑誌のようなものの片端^{かたはし}が見えたので、私はそつと首を延して差覗くと、いずれも大部のものと思われる種々なる洋書が座敷の壁際に高く積重ねてあるらしい様子であつた。世間には往々読まざる書物をれいれいと殊更人の見る処に飾立てて置く人さえあるのに、これはまた何という一風変つた癪癖であろう。私は『柵草紙』以来の先生の文学とその性行について、何とはなく沈重に考え始めようとした。あたかもその時である。一際高く漂い来る木犀の匂と共に、上野の鐘声は残暑を払う涼しい夕風に吹き送

られ、明放した観潮楼上に唯一人、主人を待つ間の私を驚かしたのである。

私は振返つて音のする方を眺めた。千駄木せんだぎの崖がけうえ上から見る彼の広漠たる市中の眺望は、今しも蒼然たる暮靄ぼあいに包まれ一面に煙り渡つた底から、数知れぬ燈火とうかがやかを輝し、雲の如き上野谷中の森の上には淡い黄たそがれ昏の微光をば夢のように残していた。私はシャワンの描いた聖女ジェネヴィエーブが静に巴里パリの夜景を見下している、かのパンテオンの壁画の神秘的な灰色の色彩を思出さねばならなかった。

鐘かねの音は長い余韻の後を追掛け追掛け撞つき出されるのである。その度たびごとにその響の湧わきいづ出る森の影は暗くなり低い市中の燈火は次第に光を増して来ると車馬の声は嵐のようにかえつて高く、やがて鐘の音の最後の余韻を消してしまった。私は茫然として再びがらんとした何物も置いてない観潮楼の内部を見廻した。そして、この何物もない楼上から、この市中の燈火を見下し、この鐘声とこの車馬の響をかわるがわるに聴澄ききすましながら、わが鷗外先生は静に書を読みまた筆を執られるのかと思うと、実にこの時ほど私は先生の風貌をば、シャワンが壁画中の人物同様神秘に感じた事はなかった。

ところが、「ヤア大変お待たせした。失敬失敬。」といって、先生は書生のように二階の梯子段はしごだんを上あがつて来られたのである。金かなきん巾の白い襯衣シャツ一枚、その下には赤い筋のはい

った軍服のツボンを穿はいておられたので、何の事はない、鷗外先生は日曜貸間の二階か何かでごろごろしている兵隊さんのように見えた。

「暑い時はこれに限る。一番涼しい。」といいながら先生は女中の持運ぶ銀の皿を私の方に押出して葉巻をすすめられた。先生は陸軍省の医務局長室で私に対談せられる時にもきまつて葉巻を勧められる。もし先生の生涯に些かたりとも贅沢らしい事があるとするならば、それはこの葉巻だけであろう。

この夕ゆうべ、私は親しくオイケンの哲学に関する先生の感想を伺うかがつて、夜も九時過再び千駄木の崖道をば根津権現の方へ下り、不忍池しのばすのいけの後を廻ると、ここにも聳え立つ東照宮とうしょうぐうの裏手一面の崖に、木の間の星を数えながらやがて広小路の電車に乗った。

私の生れた小石川こいしかわには崖が沢山あった。第一に思出すのは茗荷谷みょうがだにの小径から仰ぎ見る左右の崖で、一方にはその名さえ気味の悪い切支丹坂きりしたんざかが斜ななめに開けそれと向い合つては名前を忘れてしまったが山道のような細い坂が小日向台町こびなただいまちの裏へと攀登よじのぼっている。今はこの左右の崖も大方は趣のない積み方をした当世風の石垣となり、竹藪も樹木も伐払きりはらわれて、全く以前の薄暗い物凄さを失ってしまった。

まだ私が七、八ツの頃かと記憶している。切支丹坂に添う崖の中腹に、大雨か何かのた
めに突然真まつしかく四角な大きな横穴が現われ、何処どこまで深くつづいているのか行先が分らぬと
いうので、近所のものは大方切支丹屋敷のあつた頃掘抜いた地中の抜道ではないかなぞと
評判した。

この茗荷谷を小日向水道町すいどうちようの方へ出ると、今も往来の真中に銀杏いちょうの大木が立つて
いて、草鞋わらじと炮烙ほうろくが沢山奉納してある小さなお宮がある。一体この水道端すいどうばたの通は片側
に寺が幾軒となくつづいて、種々の形をした棟門むねもんを並べている処から、今も折々私の喜
んで散歩する処である。この通を行尽すと音羽おとわへ曲ろうとする角に大塚火薬庫のある高い
崖が聳え、その頂いただきにちらばらと喬木きようぼくが立っている。崖の草枯れ黄み、この喬木の冬ふゆ
枯こした梢こずえに鳥が群むれをなして棲とまる時などは、宛然さながら文人画を見る趣がある。これと対して牛
込ごめの方を眺めると赤城あかぎの高地があり、正面の行手には目白の山の側面がまた崖をなして
いる。目白の眺望は既に蜀山人しよくさんじんの東豊山十五景の狂歌にもある通り昔からの名所で
ある。蜀山人の記に曰く

東豊山新長谷寺しんちようくくじ 目白不動尊めじろふどうそんのたゞせ玉へる山は宝永の頃再昌院さいしやういん法印ほういんのす
める関口せきぐちの疏儀そぎしやう荘よりちかければ西南せいなんにかたぶく日影に杖をたてゝ時しらぬ富

士の白雪しらゆきをながめ千町せんちょうの田面たのものみどりになびく風に涼みてしばらくいきをのぶ
とぞ聞えし又物部もののべの翁おきなの牛込うしごめにいませし頃にやありけん南郭なんかく春しゅん台だい蘭亭らんていを
はじめとしてこのほとりの十五景をわかちてからうたに物せし一巻いっかんをもみたりし事
あればわが生れたる牛込の里ちかきあたりのけしきもなつかしくこゝにその題をうつ
して夷歌いがかによりつゞけぬるもそのかみ大黒屋だいこくやときこえし高たかどのには母の六十の賀の
筵むしろをひらきし事ありしも又天明てんめいのむかしなればせき口ぐちの紙の漉すきかへし目白の滝のい
とのくりことになんありける

鶉山桜花

昔みし田鼠むぐらうづらの山ぎくら化けしての後のちは花もちらほら

城門緑樹

の魚木しやちほこうおにのぼる青葉山わたりやぐらの牛込うしごめの門もん

溪辺流螢

何がしの大あたまにも似たるかなかまくら道みちに出戸でとの螢ほたるは

桂田落月

しら露のむすべる霜のをくてよりわせ田だにはやく落おつる月影

平田香稻

平かな水田もことし代がよくてふねのほにほがさくかとぞみる

寺前紅楓

てらまへて酒のませんともみぢ見の地口まじりの顔の夕ばへ

月中望嶽

八葉の芙蓉の花を一りんのかつらの枝にさかせてぞみる

江村飛雪

酒かひにゆきの中里ひとすぢにおもひ入江の江戸川の末

長谷梵宇

明王のふるきをもつてあたらしきにゐはせ寺の法師たるべし

赤城霞色

朝夕のかすみのいろも赤城やまそなたのかたにむかでしらるゝ

高田叢祠

みあかしの高田のかたにひかりまち穴八幡か水いなりかも

済松鐘磬

さいしょうじそしん あま
済松寺祖心の尼の若かりしむかしつけたるかねの 声々 こえこえ

田間 一路

横にゆく蟹 かにがわ 川こえて真直 まつすぐ に通る門田 かどた の中ぜきの道 なか

巖畔酒壚

杉のはのたてる門辺 かどべ に目白おし羽觴 うしよう を飛 とば す岸 へ の上 ちや の茶や

堰口水碓

水車 みずぐるま くるくめぐりあふことは人目つゝみのせき口 ぐち もなし

去年の暮巖谷 いわやしろく 四六君小波先生令弟と図 はか らず木曜会忘年会の席上に邂逅 かいこう した時談話はた

またまわが『日和下駄 ひよりげた』の事に及んだ。四六君は麴 こうじまち 町平川 ひらかわちよう 町から永田 ながたちよう 町の裏通

へと上る処に以前は実に幽邃 ゆうすい な崖があつたと話された。小波 さざなみ 先生も四六君も共々 ともども そ

の頃は永田町なる故 いちろく 一六先生の邸宅にまだ部屋住 へやずみ の身であつたのだ。丁度その時分私も

一時父の住まつた官舎がこの近くにあつたので、憲法発布当時の淋しい麴町 こうじまち の昔をいろい

ろと追想する事ができる。一年ほど父の住 すま つておられた某省の官宅もその庭先がやはり急

な崖になつていて、物凄 たけやぶ いばかりの竹藪であつた。この竹藪には蟾 ひきがえる 蜥 は のいた事これ

また気味悪いほどで、夏の夕 ゆうべ まだ夜にならない中から、何十匹となく這 は い出して来る蟾蜍

に庭先は一面大な軒太石でも敷詰めたような有様になる。この庭先の崖と相對しては、一筋の細い裏通を隔てて独逸公使館の立つてゐる高台の背後がやはり樹木の茂った崖になつてゐた。私は寒い冬の夜なぞ、日本伝来の迷信に養われた子供心に、われにもあらず幽霊や何かの事を考え出して一生懸命に瘦我慢しつつ真暗な廊下を独り厠へ行く時、その破れた窓の障子から向の崖なる木立の奥深く、巍然たる西洋館の窓々に燈火の煌々と輝くのを見、同時にピアノの音の漏るるを聞きつけて、私は西洋人の生活をば限りもなく不思議に思つたことがあつた。

近頃日和下駄を曳摺つて散歩する中、私の目についた崖は芝二本榎なる高野山の裏手または伊皿子台から海を見るあたり一帯の崖である。二本榎高野山の向側なる上行寺は、其角の墓ある故に人の知る処である。私は本堂の立つてゐる崖の上から摺鉢の底のようなこの上行寺の墓地全体を覗き見る有様をば、其角の墓諸共に忘れがたく思つてゐる。白金の古刹瑞聖寺の裏手も私には幾度か杖を曳くに足るべき頗る幽邃なる崖をなしてゐる。

麻布赤坂にも芝同様崖が沢山ある。山の手に生れて山の手に育つた私は、常にかの輕

快瀟^{しやうしや} 洒^{しや} なる船と橋と河岸^{かしのがめ}の眺を専有する下町^{したまち}を羨むの余り、この崖と坂との侘^き倔^{くつ}なる風景を以て、大^{おお}に山の手^{おおい}の誇とするのである。『隅田川兩岸一覽』に川筋の風景をのみ描き出した北斎^{ほくさい}も、更に足曳^{あしびき}の山の手のために、『山復山^{やまたやま}』三巻を描いたではな
いか。

第十 坂

前回記する処の崖といささか重^{ちようふく}複^{ふく}する嫌いがあるが、市中^{しちゆう}の坂について少しく述べたい。坂は即ち平地^{へいち}に生じた波瀾である。平坦なる大^お通^{とお}は歩いて滑らず躓^{つまず}かず、車を走らせて安全無事、荷物を運ばせて賃銀安しといえども、無^{ぶり}聊^{りよう}に苦しむ閑^{かん}人^{じん}の散歩には余りに单调^{たうどう}に過^{すぎ}る。けだし東京市中における眺望の一直線をなす美観は、橋あり舟ある運河の岸においてのみこれを看^み得^うるが、銀座日本橋の大通の如き平坦なる街路の眺望に至つては、われら不幸にしていまだ泰^{たい}西^{せい}の都市において経験したような感興を催さない。西洋の都市においても私は紐^{ニュー}育^{ヨーク}の平坦なるFifth Avenueよりコロンビヤの高台に上る石^{せき}級^{きゆう}を好み、巴里^{パリ}の大^{サール}通^{ヴァール}よりも遙^{はるか}にモンマルトルの高台を愛した。里昂^{リオン}にあつてはクロワルツスの坂道から、手摺^{てず}れた古い石の欄干を越えて眼下にソオンの河岸^{かし}通^{どおり}を見下^{みおろ}しながら歩いた夏の黄^{たそがれ}昏^{くれ}をば今だに忘れ得ない。あの景色を思浮べる度々、私は仏蘭西^{フランス}の都会は何処へ行つてもどうしてあのように美しいのであらう。どうしてあのように軟く人の空想を刺^さすように出来ているのであらうと、相も変らず遣^{やる}瀬^せなき追憶の夢にのみ打

沈められるのである。

その頃私は年なお三十に至らず、孤身飄然、異郷にあつて更に孤客となるの怨なく、
到る処の青山これ墳墓地ともいいたいほど意気頗豪なところがあつたが今その十年の
昔と、鬢髪いまだ幸にして霜を戴かざれど精魂漸く衰え聖代の世に男一匹の身を持てあ
ぐみ為す事もなき苦しさに、江戸絵図を懐中に日和下駄曳摺つて、既に狂歌俳句に読
古された江戸名所の跡を弔い歩む感慨とを比較すれば、全くわれながら一滴の涙なきを
得ない。さりながら、かの端唄の文句にも、色氣ないとて苦にせまい賤が伏家に月もさす。
徒に悲み憤つて身を破るが如きはけだし賢人のなさざる処。われらが住む東京の都市いか
に醜く汚しというとも、ここに住みここに朝夕を送るかぎり、醜き中にも幾分の美を搜り
汚き中にもまた何かの趣を見出し、以て気は心とやら、無理やりにも少しは居心地住心地
のよいように自ら思いなす処がなければならぬ。これ元来が主意というものなき我が日和
下駄の散歩の聊か以て主意とする処ではないか。

そもそも東京市はその面積と人口においては既に世界屈指の大都である。この盛況は銀
座日本橋の如き繁華の街路を歩むよりも、山の手の坂に立つて遙に市中を眺望する時、誰
が目にも容易く感じ得らるる処である。この都に生れ育ちて四時の風物何一つ珍しい事も

ないまでに馴れ過ぎてしまったわれらさえ、折あつて九段坂、三田聖坂、あるいは霞ヶ関を昇降する時には覚えずその眺望の大なるに歩みを留めるではないか。東京市は坂の上の眺望によつて最もよくその偉大を示すといふべきである。古来その眺望よりして最も名高きは赤坂靈南坂上より芝西の久保へ下りる江戸見坂である。愛宕山を前にして日本橋京橋から丸の内を一目に望む事が出来る。芝伊皿子台上の汐見坂も、天然の地形と距離との宜しきがために品川の御台場依然として昔の名所絵に見る通り道行く人の鼻先に浮べる有様、これに因つてこれを観れば古来江戸名所に数えらるる地点悉く名ばかりの名所でない事を証するに足りる。

今市中の坂にして眺望の佳なるものを挙げんか。神田お茶の水の昌平坂は駿河台いわさきていもんぜん岩崎邸門前の坂と同じく万世橋を眼の下に神田川を眺むるによろしく、梶角坂水道橋内駿河台西方は牛込麴町の高台並びに富嶽を望ましめ、飯田町の二合半坂は外濠を越え江戸川の流を隔てて小石川牛天神の森を眺めさせる。丁度この見晴しと相對するものは則ち小石川伝通院前の安藤坂で、それと並行する金剛寺坂荒木坂服部坂大日坂などは皆齊しく小石川より牛込赤城番町辺を見渡すによい。しかしてこれらの坂の眺望にして最も絵画的なるは紺色なす秋の夕靄の中より人家の灯のちらつ

遠吠え聞ゆる折なぞ市中とは思えぬほどのさびしさである。坂はまた土地の傾斜に添うて立つ家屋塀樹木等の見通しによつて大に眼界を美ならしむる。則ち旧加州侯の練塀立ちつづく本郷の暗闇坂の如き、麻布長伝寺の練塀と赤門見ゆる一本松の坂の如きはその実例である。

私はまた坂の中で神田明神の裏手なる本郷の妻恋坂、湯島天神裏花園町の坂、また少しく辺鄙なるを厭わず白金清正公のほとりの坂、さては牛込築土明神裏手の坂、赤城明神裏門より小石川改代町へ下りる急な坂の如く神社の裏手にある坂をば何となく特徴あるように思い、通る度に物珍らしくその辺を眺めるのである。坂になつた土地の傾斜は境内の鳥居や銀杏の大木や拝殿の屋根、玉垣などをば、或時は人家の屋根の上、或時は路地の突当りなぞ思いも掛けぬ物の間からいろいろに変化さして見せる。私はまたこういう静な坂の中途に小じんまりした貸家を見付ると用もないのに必ず立止つては仔細らしく貼札を読む。何故というに神社の境内に近く佗住居して読書に倦み苦作につかれた折窃と着のみ着のまま羽織も引掛けず我が家の庭のように静な裏手から人なき境内に歩入つて、鳩の飛ぶのを眺めたり額堂の絵馬を見たりしたならば、何思うともなく唯茫然として、容易くこの堪えがたき時間を消費する事が出来はせまいか

と考えるからである。

東京の坂の中にはまた坂と坂とが谷をなす窪地を間にして向合に突立っている処がある。前章市内の閑地を記したる条に述べた鮫ヶ橋の如き、即ちその前後には寺町と須賀町の坂が向合いになっている。また小石川茗荷谷にも両方の高地が坂になっている。小石川柳町には一方に本郷より下る坂あり、一方には小石川より下る坂があつて、互に對峙している。こういう処は地勢が切迫して坂と坂との差向いが急激に接近していれば、景色はいよいよ面白く、市中に偶然温泉場の街が出来たのかと思わせるような処さえある。

市ヶ谷町から仲之町へ上る間道に古びた石段の坂がある。念仏坂という。麻布飯倉のほとりにも同じような石段の坂が立っている。雁木坂と呼ぶ。これらの石級磴道はどうかすると私には長崎の町を想い起すすがともなり得るので、日和下駄の歩みも危くコツコツと角の磨滅した石段を踏むごとに、どうか東京市の土木工事が通行の便利な普通の坂に地ならししてしまわないようにと私は心竊に念じているのである。

第十一 夕陽 附富士眺望

東都の西郊めぐろ目黒ゆうひに夕日おかケ岡というがあり、大久保おおくほに西向にしむきてんじん天神というがある。俱ともに夕日の美しきを見るがために人の知る所となつた。これ元より江戸時代の事にして、今日わざわざかかる辺鄙へんびの岡に杖を留とどめて夕陽ゆうひを見るが如き愚をなすものはあるまい。しかし私は日頃しきり頻に東京の風景をさぐり歩くに当つて、この都会の美観と夕陽せきようとの関係甚だ浅からざる事を知つた。

立派な二重橋の眺望も城壁の上なる松の木立こだちを越えて、西の空一帯に夕日の燃立もえたつ時最も偉大なる壯観を呈する。暗緑色の松と、晚霞ばんかの濃い紫と、この夕日の空の紅こうしよく色とは独り東京のみならず日本の風土特有の色彩である。

夕焼ゆうやけの空は堀割に臨む白い土蔵どぞうの壁に反射し、あるいは夕風を孕はらんで進む荷船にふねの帆を染めて、ここにもまた意外なる美観をつくる。けれども夕日と東京の美的關係を論ぜんに、四谷よつや麴こうじまち町青山あおやま白金しろかねの大通おおどおりの如く、西向きになつてゐる一本筋の長い街路について見るのが一番便宜である。神田川かんだがわや八丁堀はつちようぼりなぞいう川筋、また隅田川すみだがわ沿

岸の如きは夕陽せきようの美を俟またざるも、それぞれ他の趣味によつて、それ相応の特徴を附する事が出来る。これに反して麴町から四谷を過ぎて新宿に及ぶ大通、芝白金から目黒めぐろぎよう行人坂にんざかに至る街路の如きは、以前からいやに駄々だだ広びらいばかりで、何一ツ人の目を惹ひくに足るべきものもなく全く場末ばすえの汚い往来に過ぎない。雪にも月にも何の風情ふぜいを増しはせぬ。風が吹けば砂すな烟けむりに行手は見えず、雨が降れば泥濘でいねい人の踵きびすを没せんばかりとなる。かかる無味殺風景の山の手の大通をば幾分たりとも美しいとか何とか思わせるのは、全く夕陽ゆうひの關係あるがためのみである。

これらの大通は四谷青山白金巢鴨すがもなぞと処は變れど、街の様子は何となく似通にかよっている。昔四谷通は新宿より甲州こうしゅう街道かいどうまた青梅街道おうめかいどうとなり、青山は大山街道おおよまかいどう、巢鴨は板橋を経て中仙道なかせんどうにつづく事江戸絵図を見るまでもなく人の知る所である。それがためか、電車開通して街路の面目一新したにかかわらず、今以て何処どことなく駅路の臭味しゅうみが去りやらぬような心持がする。殊に広い一本道のはずれに淋しい冬の落日を望み、西北にしきたの寒風かんふうに吹付けられながら歩いて行くと、何となく遠い行先の急いそがれるような心持がして、電車自転車のベルの音をば駅路の鈴に見立てたくなるのも満更まんざら無理ではあるまい。

東京における夕陽せきようの美は若葉の五、六月と、晩秋の十月十一月の間を以て第一とする。

山の手は庭に垣根に到る処しんじゆ新樹の緑滴したたらんとするその木立の間より夕陽の空紅くれなゐに染出そめいだされたる美しさは、下町の河添かわぞゑには見られぬ景色である。山の手の中でも殊なに木立深く鬱蒼とした処といえ、自ら神社仏閣の境内を扱ばなければならぬ。雑司ぞうしヶ谷の鬼子きし母神もじん、高田たかたの馬場の雑木林ばば ぞうきばやし、目黒の不動、角つのはず筈じゆうにそうの十一社など、かかる処は空を蔽う若葉の間より夕陽を見るによいと同時に、また晩秋の黄葉こうようを賞するに適している。夕陽影裏落葉を踏んで歩めば、江湖淪落の詩人ならざるもまた多少の感慨なきを得まい。

ここに夕陽せきようの美と共に合せて語るべきは、市中より見る富士山の遠景である。夕日に對する西向きの街からは大抵富士山のみならずその麓つらなに連る箱根大山秩父の山脈までを望み得る。青山一帯の街は今なお最もよくこの眺望に適した処で、その他九段坂上の富士見町通しみちようどおり、神田駿河台かんだするがだい、牛込寺町辺うしごめてらまちへんも同様である。

関西の都会からは見たくも富士は見えない。ここにおいて江戸児えどっこは水道の水と合せて富士の眺望を東都の誇ほこりとなした。西に富士ヶ根東に筑波の一語は誠によく武蔵野の風景をい尽したものである。文政年間葛飾かつしかほくさい北斎北斎『富嶽三十六景』の錦絵にしきえを描くや、その中うち江戸市中より富士を望み得る処の景色けいしよくおよ凡そ十数個所を扱んだ。曰く佃島つくだじま、深川ふかがわ万年橋まんねんばし、本所ほんじよ豎川たてかわ、同じく本所五ツ目羅漢寺いつめらかんじ、千住せんじゆ、目黒、青山竜巖寺あおやまりゆうがんじ、青

山穩おんでんすいしや田水車かんだするがたい、神田駿河台にほんばしきよつじよう、日本橋橋上するがちようえちごやてんとつ、駿河町越後屋店頭あさくさほんが、浅草本願寺んなじ、品川御殿山しながわごてんやま、及び小石川の雪せつちゆう中である。私はまだこれらの錦絵をば一々実景に照し合した事はない。それ故例えば深川万年橋あるいは本所豎川辺より江戸時代においても果して富士を望み得たか否かを知る事が出来ない。しかし北斎及びその門人昇亭しやうていほ北寿くじゆまた一立斎いちりゆうさい広重ひろしげらの古版画は今日なお東京と富士山との絵画的關係を尋ぬるものに取つては絶好の案内たるやいうを俟たない。北寿が和蘭陀風オランダふうの遠近法を用いて描いたお茶の水の錦絵はわれら今日目のあたり見る景色と変りはない。神田聖堂かんだせいどうの門前を過ぎてお茶の水に臨む往來の最も高き処たたずに佇んで西の方かたを望めば、左には對岸の土手を越して九段の高台、右には造兵廠ぞうへいしやうの樹木と並んで牛込市ケ谷辺うしごめいちやへんの木立を見る。その間を流れる神田川は水道橋より牛込揚場あげばへん辺の河岸かしまで、遠いその眺望のほずれに、われらは常に富嶽とその麓の連山を見る光景、全く名所絵と異なる所がない。しかして富嶽の眺望の最も美しきはやはり浮世絵の色彩に似て、初夏晩秋の夕陽せきように照されて雲と霞は五色に輝き山は紫に空は紅くれなゐに染め尽される折である。

当世人とうせいじんの趣味は大抵日比谷公園の老樹に電気燈を点じて奇麗奇麗と叫ぶ類たぐいのもので、清夜せいやに月光を賞し、春風しゆんぷうに梅花を愛するが如く、風土固有の自然美を敬愛する風雅の

習慣今は全く地を払ってしまった。されば東京の都市に夕日が射^さそうが射すまいが、富士の山が見えようが見えまいがそんな事に頓着するものは一人もない。もしわれらの如き文学者にしてかくの如き事を口にせば文壇は挙^{こぞ}つて気障^{きざ}な宗^{そうしやう}匠^{そうしやう}か何ぞのように手^て厳^ひく擯^ひ斥^{んせき}するにちがいない。しかしつらつら思えば伊^イ太^タリ^リヤミ^ミラ^ラノの都はアルプの山^{さん}影^{えい}あつて更に美しく、ナポリの都はヴェズウブ火山の烟^{けむり}あるがために一^{ひと}際^{ときわ}旅するものの心に記憶されるのではないか。東京の東京らしきは富士を望み得る所にある。われらは徒^{いたずら}に議員選挙に奔走する事を以てのみ国民の義務とは思わない。われらの意味する愛国主義は、郷土の美を永遠に保護し、国語の純化洗練に力^{つと}むる事を以て第一の義務なりと考うるのである。今や東京市の風景全く破壊せられんとしつつあるの時、われらは世人のこの首都と富嶽との關係を輕視せざらん事を希^{こいねご}うて止^やまない。安永頃の俳書『名^め所^{いしよ}方^{ほう}角^{かく}集^{しゅう}』に富士眺望と題して

名月や富士見ゆるかと駿河町
するがちやう

素竜

半分は江戸のものなり不^ふ尽^{じん}の雪

立^り志^{ゆうし}

富士を見て忘れんとしたり大晦日
おおみそか

宝馬

十余年前樂天居小波山人の許に集まるわれら木曜会の會員に羅臥雲と呼ぶ眉目秀

麗なる清客しんきやくがあつた。日本語を善くする事邦人に異らず、蘇山人そさんじんと戲号ぎごうして俳句を吟じ小説をつづりては常にわれらを後にしりえ 瞠どうじゃく 若わかたらしめた才人である。故山こさんに還かえる時一句を残して曰く

行春ゆくはるの富士も拝まんわかれかな

蘇山人かんが湖南の官衙かんがにあること歳余病さいよまいを得て再び日本に來遊し幾いくばく何もなくして赤坂あかさか一ツ木ぎの寓居に歿した。わたしは富士の眺望よりしてたまたま蘇山人が留別の一句を想い惆悵ちやうちやうとしてその人を憶おもうて止やまない。

君は今鶴にや乗らん富士の雪

荷風

大正四年四月

青空文庫情報

底本：「荷風隨筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風隨筆 二」岩波書店

1981（昭和56）年12月17日第1刷発行

※誤植を疑った箇所を、底本の親本の表記にそつて、あらためました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、大振りにつくつています。

※「屋敷」と「屋舗」の混在は、底本通りです。

※表題は底本では、「日和下駄《ひよりげた》 一名 東京散策記」となっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2009年12月3日作成

2019年12月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日和下駄

一名 東京散策記

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 永井荷風

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>